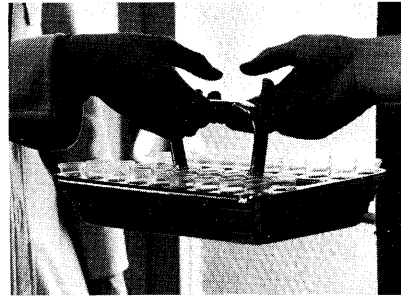
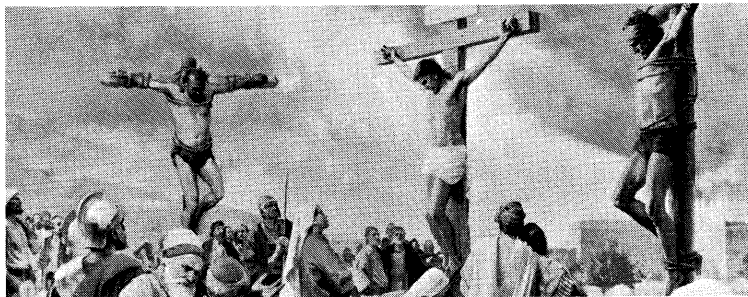


聖徒の道 5

1977

Olo'u lava talaaga. Mi diario. Min dagbok.
 Ko'Eku Tohi noa. 나의 일지. Min dagbog
 Mijn dagboek. Päiväkirjani. 私の日記
 Mon journal. 我的日記. Mein Tagebuch
 Il mio diario. min dagbok. Meu diário
 Olo'u lava talaaga. Mi diario. Min dagbok.
 Mijn dagboek. Päiväkirjani. 私の日記
 Ko'Eku Tohi noa. 나의 일지. Min dagbog
 Mon journal. 我的日記. Mein Tagebuch
 Il mio diario. min dagbok. Meu diário
 Olo'u lava talaaga. Min diario. Min dagbok.
 Ko'Eku Tohi noa. 我的日記. Min dagbog
 Mijn dagboek. Päiväkirjani. 私の日記
 Mon journal. 나의 일지. Mein Tagebuch
 Il mio diario. min dagbok. Meu diário
 Mijn dagboek. Päiväkirjani. 私の日記
 Ko'Eku Tohi noa. 我的日記. Min dagbog
 Olo'u lava talaaga. Mi diario. Min dagbok
 Mijn dagboek. Päiväkirjani. Mein Tagebuch.
 Il mio diario. min dagbok. Min dagbog
 Mon journal. Il mio diario. Min dagbok.
 Ko'Eku Tohi noa. 나의 일지. Päiväkirjani.
 Meu diário. Il



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプラー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

諮問委員会

ゴードン・B・ヒンクレー
マービン・J・アシュトン
L・トム・ペリー
マリオン・D・ハンクス
ジェームズ・A・カリモア
ロバート・D・ヘイルズ

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

八木沼 修一 (日本語コーディネーター)

1977年 5月号

も く じ

永遠の事柄—危険を冒してはいないだろうか……	スペンサー・W・キンボール……	245
王国の記録……	ジミー・B・パーカー……	249
個人の歴史……	ボイド・K・パッカー……	252
どの女性にも扶助協会が必要である……	マーク・E・ピーターセン……	253
初めて知った母……	ウォンダ・W・バジャー……	254
祖父のプレゼント……	ブルース・ライマン・ビショップ……	255
予言者の力……	キース・クリステンセン……	257
大切な第一歩……	ナンシー・M・アームストロング……	258
日記をつけましょう……		262
家庭の夕べ……		263
おもちゃばこ……		264
父と息子……	チョーンシー・C・リドル……	265
教える準備……	セオ・E・マキーン……	270
「もっとよく教えるために」……	デビッド・O・マッケイ……	272
ローカル・ニュース……		274

聖徒の道 5月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5-8-8
定 価 年間予約1,700円 1部150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター



永遠の事柄

危険を冒してはいないだろうか

大管長

スペンサー・W・キンボール

長年、私は自分の先祖の生涯に思いをはせてきたが、年と共に彼らに対する感謝の念は、深まるばかりである。先祖について知ることによって、私は先祖に心を向けることができただけでなく、永遠というものを一層明確に理解することができた。私自身の人生は現在のみならず、私の先祖の人生にも深く根を下ろしているのである。

祖父が子供たちに宛てたメッセージを読んでみたい。「私が心にかけているのはただ永遠に関する事柄だけである。神にかかわる偉大な事柄や義人を待ち受けている栄光を思い浮かべる時、また道はまっすぐであるがそれを見いだす者が少ないことを思う時、私は主が私の子供たちを祝福したもうて、救いを得させて下さるようにと祈りたい気持ちになる。私は、人がまっすぐな道を見だし、神々となる時代に生を受けていることを神に感謝している。」(オルソン・F・ホイットニー *Life of Heber C. Kimball* 「ヒーパー・C・キンボールの生涯」 p. 513 参照)

このように、永遠に関わる事柄に心を留めて生活するならば、私たちはもっと適切な決断を下せるであろう。その理由は、ブリガム・ヤング大管長の次の言葉に表わされているように思う。「私に聖徒たちを祝福できることがあるとすれば、それはただひとつ、彼らに『事物のあるがままを見る目』を与えることだと思う。」(*Journal of Discourses* 「説教集」 p. 513) 興味深いのは、「事物のあるがまま」という言葉が聖典の言葉だということである。聖典には真理について、「事物の現在あるがまま、過去にありしまま、未来にあるがままの知識なり」(教義と聖約 93:24)と記されている。モルモン経のヤコブもまた、「『みた

ま』は真実を話し……現在の事をありのままに示し、未来の事もまたありのままに示したもう」(ヤコブ4:13)と語っている。

永遠についての理解が深まれば、それだけ私たちは、携わっている主のみ業が死の幕のかなたでも全く同様にこなわれている崇高で偉大なみ業であることを明確に理解するのである。

私たちにはこの地上で行なわなければならない多くの仕事がある。私は、教会のすべてのプログラムは、伝道活動、神殿活動、教会員がいつも活発で忠実であるようにすること、この3つの活動のいずれかに入ると思う。しかもいずれの活動も、その価値と重要性はいくら強調しても強調し過ぎるということがないのである。急激な発展を見せている教会の伝道プログラムは、この神権時代において最大の規模となり、私たちは現在、多くの同胞に福音を宣べ伝え、教え、バプテスマを施している。しかし伝道活動は、現在この地上に住んでいるあらゆる国民、部族、国語、民族に福音を宣べ伝えることだけにとどまらない。この世にいる間に福音を聞くことなく、あるいは受け入れることなく死んでいった何十億という天父の子供たちの間で幕を越えて続いているのである。この点に関する私たちの大切な役割は、幕のかなたで福音を受け入れる人々のために、必要な儀式をこの世で行なうことである。霊界は、私たちが代わって地上の儀式を行なうことを心待ちにしている霊たちであふれている。私たちは伝道活動や神殿、系図活動に自分勝手に優劣をつけることがよくあるが、どれも救いに関わる重要な業である。従って、そうした区別はしないようにしていただきたい。

これまでの歴史の中で、主が御自身に従う人々を集め、福音と救いに関するある儀式を確立された時期があった。それを私たちは福音の神権時代と呼んでいる。福音の神権時代は、聖なる神権と神権を行使する権威を授ける鍵とを有する予言者たちによって率いられていた。私たちは、立派な靈感あふれる義の業に従事した彼らを尊敬している。私たちは、現在の神権時代に先立つそれぞれの神権時代において、神のすべての眷族の救いに関するみ業の一面が紹介され、その業が成就されたことを知っている。

時満ちたる神権時代として聖典に明らかにされているこの神権時代に、主は、天と地の両方にあるすべてのものを一つに寄せ集めると約束された。(教義と聖約17:13; エペソ1:10参照)

確かに、「すべてのものを一つに寄せ集めること」は、「神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時」(使徒3:21)について述べた使徒ペテロの言葉に関連している。特に、この極めて重要な予言は、王国の様々な神様の鍵を持っていた古代の予言者たちが戻って来ことも指している。

このように、古代の父祖たちが保持していた聖なる族長制度の鍵は回復された。すなわち、アブラハムの偉大な血統に福音と神権が最終的に回復される時代が来たのである。この神権により「世界の眷族ごとごとく祝福を得ん」(アブラハム2:11)とは、福音の祝福が個人個人にもたらされるという意味であり、また神権の新しくかつ永遠の結婚誓約に入ることによって、地上の人々の中から選ばれて集められた神のすべての子らは、家族単位でアブラハムの血統に結び固められ得ること、他の言葉で言えば、組織された神の永遠の家族になり

得るということである。

今日における教会と教会の持つ神権の組織ならびに活動が、教会の保持する鍵に基づいているということに何の疑問があるだろうか。私たちの教会は、イスラエルの集合に可能な限り最大限寄与している伝道の教会である。この教会は、家族を土台にした教会である。家族や個々の会員が天の王国における救いを得る備えができるよう、その経済的、知的、霊的面での上上に重きを置いて自立を図る教会である。この教会はまた、私たち自身と、約束は受けているもののまだ救いの儀式にあずかっていない無数の天父の子らのために、神殿と系図の活動に積極的に携わっている、教会である。これは、霊界で行なわれている大いなる伝道活動をさらに意義あるものとする業である。

この業に関して私はこれまで何度も聖書を読んできたが、そのたびにパウロがコリントの聖徒たちに宛てた力強い質問に心を打たれた。パウロはこう記している。

「そうでないとすれば、死者のためにバプテスマを受ける人々は、なぜそれをするのだろうか。もし死者が全くよみがえらないとすれば、なぜ人々が死者のためにバプテスマを受けるのか。また、なんのために、わたしたちはいつも危険を冒しているのか」(Iコリント15:29-30)

私は、パウロのこの最後の質問に非常に考えさせられた。世の人々が危険を冒しているというのはどういうことだろうか。それは、家族や親しい人々なくして彼らは救われないということである。彼らは、福音を進んで受け入れようと、あるいは拒もうと、福音が伝えられて選択の機会が与えられるまでは、危険を冒している状態にある。また伝道活動についても、私たちもまた危険を冒していることになるのである。

同時に、教会員である私たちは、神殿活動に携わらなければ危険を冒していることになる。私たちの時間の大半が日常生活の雑事に取られてしまうことはもちろんであるが、この重大な時期に王国の会員として名を連ねている人々は、もっと多くの時間と努力をこの大切なみ業のために捧げるよう努めなければならない。

霊界とその後の世界に関するこれらの永遠の事柄は、救い主が十字架におかかりになった時、心にかけておられたことであった。そのことは、悔い改めた盗人に向かって言われた主の言葉の中に表われている。この言葉は多くの人々を混乱させてきた。

「十字架にかけられた犯罪人のひとりが、『あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ』と、イエスに悪口を言いつづけた。

もうひとりは、それをたしなめて言った、『おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか。』

お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない。』

そして言った、『イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください。』

イエスは言われた、『よく言うておくれが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう。』(ルカ23:39-43)

これはどういう意味だろうか。全く文字通りの意味である。時が過ぎ、3人に死が訪れる。そして彼らは別の世界に行く。

しかし「あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいて
あろう」ということである。

皆さんは、ひとりの女が救い主の葬られた墓に行った時、そ
こに救い主がおられなかったことを覚えておられるであろう。
救い主は園で彼女に会い、こう言われた。「わたしにさわって
はいけない。わたしは、まだ父のみもと（天）に上っていない
のだから。……わたしは、わたしの父またあなたがたの父であ
って、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもと
へ上って行く」（ヨハネ20：17）救い主は、まだ天の御父に会
っておられなかったのである。従って、救い主は、私たちが考
えている天に直接行かれたのではなかった。どこか他の場所に
行かれたのである。

その後、ペテロは、救い主がどこに、何のために行かれたか
について次のように説明している。

「キリストも、あなたがたを神に近づけようとして、自らは
義なるかたであるのに、不義なる人々のために、ひとたび罪の
ゆえに死なれた。ただし、肉においては殺されたが、霊におい
ては生かされたのである。

こうして、彼は獄に捕われている霊どものところへ下って行
き、宣べ伝えることをされた。……

死人にさえ福音が宣べ伝えられたのは、彼らは肉においては
人間としてさばきを受けるが、霊においては神に従って生きる
ようになるためである」（I ペテロ 3：18-19； 4：6）

主は、彼らが罪を悔い改め、態度や生活を変え、霊において
神に従って生きることができるよう、その機会を備えられた
のであった。そうした霊がどれほどの数にのぼるのか、私たち
にはわからない。しかし、多くの人々が戦争や疫病、様々な事
故で亡くなっていることは知っている。また、霊界は、アメリ
カの独立宣言の署名者たちが待っていたように、私たちが仕事
にとりかかるのを待っている霊たちで一杯であることを知って
いる。独立宣言の署名者たちは、ウィルフォード・ウッドラフ
大管長に「なぜあなた方は私たちを待たせておくのですか」と尋
ねた。これは私たちの民が私たちに問うている言葉でもある。

祖父母や曾祖父母など、私たちの先祖についてはどうだろう
か。彼らは私たちのことをどう思っているだろうか。私たちは
彼らの子孫であり、彼らの神殿の業を行なう責任を負っている。
しかも、美しい主の神殿はいつも建っている。しかし神殿がい

つも私たちの姿で満ちあふれていることはない。私たちには避
けることのできない重大な責任がある。もしこの大切な仕事を
行なわなければ、私たちは危険にさらされるだろう。

私は、聖徒たちが神殿で行なわれる業の素晴らしさをすべて
現実のものとして理解するように願っている。神殿の仕事はこ
の世で行なわれるものであり、私たちを別のよりよい世界に備
えさせてくれるものである。

神殿は、生者と死者に関する聖なる儀式を行なうところであ
る。資格ある教会員はできる限りしばしば神殿に行って、この
大切な業に携わるようにすべきである。神殿で行なわれる儀
式のひとつにエンダウメントがある。この儀式は、前世の存在
からこの地上での経験、さらに昇栄に至るまでの男性と女性の
永遠の旅に関する一連の教えから成っている。

ブリガム・ヤングはエンダウメントについて、次のように述
べている。

「定義を簡潔に申し上げよう。あなたにとってエンダウメン
トとは、主の宮居において、あなたがこの世を去った後、番
人として立っている天使たちの前を通り過ぎ、……昇栄を得
られるようにするに必要なすべての儀式を受けることである」
（Discourses of Brigham Young 「ブリガム・ヤング説教集」
p. 416）

エンダウメントを初め、神殿で行なわれる儀式はすべて神聖
である。従って、神殿に入り、儀式を受けようとする人は、よ
く準備して自らをふさわしい状態に整えなければならない。教
会に改宗した人は、バプテスマを受けて間もなく、神殿に行き
たいという気持ちを強く抱くことがよくある。しかし、彼らの
思いを永遠の事柄に向けるには時間がかかるし、その生活を整
えて神殿に入るにふさわしい状態にまで高めるのにも時間を要
する。従って、私たちはステーク部長と監督に、彼らが福音に
おいて十分に成長するまで、神殿に行つてエンダウメントを受
けることを推薦しないように勧告している。また、新しい改宗
者はこれらの儀式と祝福を受けるに先立ち、バプテスマを受け
てから少なくとも1年間、そのための備えをしなければならない
という方針を定めている。私たちはまた、神殿がふさわしく
ない行ないによって汚されることがないように配慮している。

どの神殿にも、「主の宮居（the Lord's house）」という言葉
が掲げられている。神殿は主の宮居であり、私たちは主の



宮居に入る時、主の客として入る。従って、私たちはできるだけ主の宮居を神聖に、また清潔に保たなければならない。

古代の神殿の中には、外部の人々の手で汚されたものが幾つかある。そのひとつはソロモン神殿で、権威のない人々が神殿に入ったため汚されてしまった。彼らは神殿の貴重な宝物を奪い、異教の地へ運び去って、偶像崇拜のために使った。しかし、神聖な場所を汚す可能性があるのは、外部の人々の行ないだけではない。

聖なる神殿はまた、教会員がふさわしくない状態、つまり受ける準備ができていなかったり、神殿内で交わす誓約を守っていないこうとする意志もない状態で神殿に行き、誓約を交わすことによっても汚される。神殿に行き、神殿の聖なる原則を軽視する人々は、神殿を汚しているのである。また、悔い改めをして自分がふさわしい者であることを十分に証明することなしに、聖なる儀式を受ける人々は、神殿の神聖を汚し、聖なる場所を汚していることになる。

全力を尽くして守るという真剣で純粋な意志のないまま約束をし、誓約を交わすと、聖なる神殿は汚される。主の神殿に入るための推薦状を受けることはもちろん大切だが、それと共に、清く汚れない、悔いの精神を持たなければならないのである。私たちは扉を開けて主の宮居に入る時、ワシントン神殿について述べられた次の言葉を思い出すことができよう。

神殿に入る時は、黄金の床に足を踏み入れるような気持ちで、また、まわりの宝石をちりばめた壁が、無限の富であるかのような気持ちで、

火の衣をまとった聖歌隊が歌っているような気持ちで入りなさい。

叫び声をあげることも駆けることもしてはならない、静かにしていなさい、

ここには神がおられるのだから。

(Words of Life 「生命の言葉」より)

私たちの中には、1分、1時間、1日、1週間、あるいは1年間、何かを待ちこがれた経験のある人がいることだろう。皆さんは、私たちの先祖がどんな思いでいるか想像できるだろうか。先祖は、数十年、数百年間、自分たちのために神殿の業が行なわれるのを心待ちにしているのである。私は先祖たちのことを想像してみた。彼らは、子孫であり地上における主の教会の会員である私たちが義務を果たすのをひたすら待っている。また、来世で彼らに会う時、私たちが地上において忠実でなかったために、彼らにとって必要な儀式を行なう機会を逸してしまったという事実を知ることが、どんなにか恐ろしいことだろうと思った。

この数ヵ月間に、私は幾つかの神殿の再献堂式に出席する特権にあずかった。恐らく主は、私たちが神殿に座して、自分たちのなすべきことを深く思いめぐらすことができるように、そのような再献堂式を行なうことを許して下さるのであろう。こうした経験から、私は極めて大切な業のために引き続き全力を尽くそう、そして人々にも同じように勧めようと決心している。

最近私は、死者のための業についての私の考えを皆さんにお話ししなければならないと強く感じてきた。というのは、死者に対する業も伝道活動と同じように急務であると感じているからである。死者に対する業も伝道活動も基本的にはひとつであり、同じものである。私が知っている限りでは、この神権時代のど

の時期にも、今のように時を同じくして4つの神殿を計画、建設し、また別の神殿を改装、再献堂したことはなかった。そのことで、私は教会幹部の兄弟たちにこう言った。「私の心にはいつもこの業のことがあります。この業を推し進めることは私たちに課せられた義務だからです。」

神殿活動の重要性を心に留め、すべての末日聖徒の家族がそれぞれの子供部屋や居間に適当な大きさの神殿の絵を飾り、それらの美しい建物の目的をしばしば思い起こすことができるならば、どんなに素晴らしいことであろう。このようにすれば、神殿結婚は今よりもずっと多くなるであろう。子供たちは、いつも神殿という目標を抱いて成長期を送るからである。私は聖徒たちにこのことをお勧めする。子供部屋や居間のマントルピースの上に神殿の絵を飾ることは、大した費用もかからず、神殿とその意義について家庭の夕べで考えたり話し合ったりする時、成長しつつある幼い子供たちの物の考え方を良い方向へ導くのに確実に役立つのである。

神殿活動は主のみ業であり、私たちは主からこれを与えられたのである。このみ業を推し進めることは、私たちの責任であり、喜びであり、特権である。み業が速やかに前進するよう、私たちは自らとみ業をよく組織しなければならない。黙示録の中で、忠実で清い生活を送っていた人々が将来(私たちにとってもまだ先のことである)、聖なる神殿で日夜働くのを見た。その時にはノーブー神殿の時代のように、神殿に入る人々の列が延々と続くであろう。祖父のヒーバー・C・キンボールは、日記に、1846年の2月も末の頃、人々は昼夜の別なく「夜を日に継ぐように」ノーブー神殿に入ったと記している。祖父はまた、ブリガム兄弟やウィラード兄弟が次から次へと人々を連れて神殿に入ったと書いている。当時、忠実な聖徒たちは神殿で与えられる多くの祝福と儀式を受けることを切望していたので、平原を渡る前の最後のわずかの時間をさいて神殿に参入したのであった。今日の私たちも、当時の人々と同じ熱意と望みをもって行動を起こすことが必要である。

私たちは教会員に、聖なる家族の記録を順次作成することにより、子孫の心をその先祖に向ける業を推進するよう奨励してきた。それらの記録は、特に「われらの死者の記録を載せた一冊の書」(教義と聖約128:24)を含めて、マラキによって言われた主の聖なる神殿に捧ぐべき「義しきに適う捧物」(教義と聖約128:24)となるのである。私たちはそれらの記録なくして主の来たりたもう日を待ちもうけることはできない。

私たちはまた教会の家族の方々に、家族を組織して伝道や福祉、家庭内での教育、神殿および系図に関する責任をより積極的に遂行し、将来に向けて生活を整えるように求めてきた。祖父のヒーバー・C・キンボールの最後の公の話は、すべての男性がその家を秩序正しくする時は来ているという意味の話であったことを思い出す。

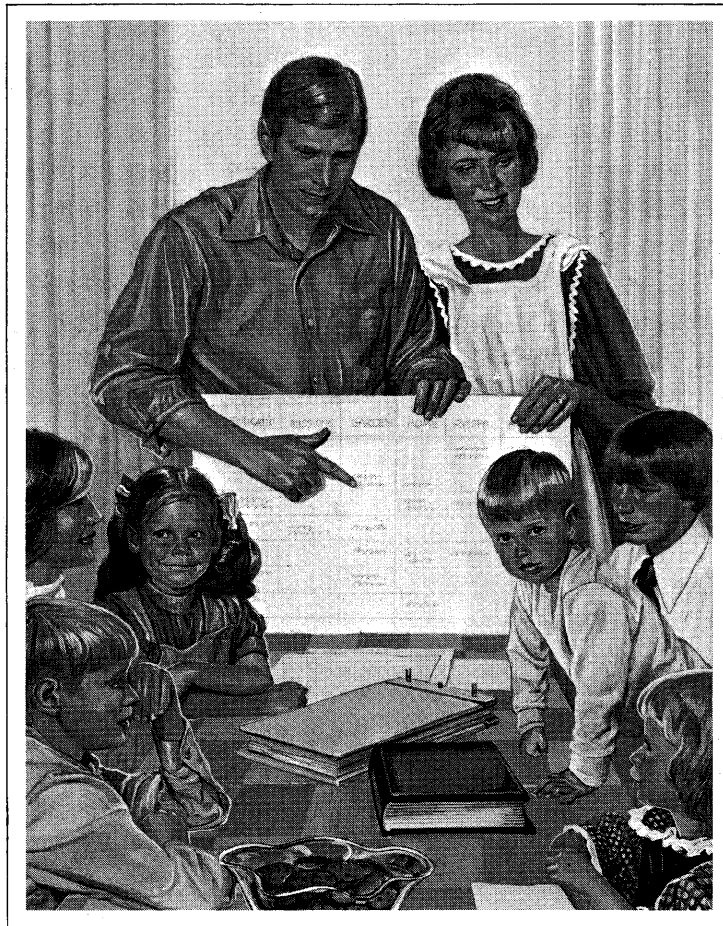
予言者ジョセフ・スミスは次のように語っている。

「兄弟よ、われらまことに偉なる大義に向って進まざらんや。進み行きて退くことなかれ。奮い起てよ、兄弟たち。進み進みて勝利に至れ。汝ら喜べ大いに喜べよ。」(教義と聖約128:22)

この大いなる時満ちたる神権時代において、主の教会の会員であるすべての人々に私が願うことは、永遠の報いを危うくすることのないようこの偉大なみ業を心から推し進めてほしいということである。

王国の記録

ジミー・B・パーカー



家族の歴史をどのように記すか

10 数年前、私は美しい花嫁衣装に身を包んだ妻の手を取って、ソルトレーク神殿の聖壇にひざまずき、今も永世にもわたる結び固めの儀式を受けた。その結び固めの儀式において与えられた約束がどのような効力を持つものであるかを、私は今、当時よりもさらにはっきりと理解することができる。

その日、新しい王国である私たちの永遠の家族の礎石が据えられた。そして年が経つにつれて、私は自分の名の下に築かれている王国の大切さを少しずつ理解するようになった。また神殿の聖壇を前に、祝福の約束と共に、「自分

の王国」の記録をつけ、保管する責任が神から与えられたこともわかるようになった。

記録をつけることは、すべての神の王国、すなわち中央の教会と地方の教会、また特に各家族にとって非常に大切である。この神権時代の初めに、予言者ジョセフ・スミスが記録をつけることの重要性を痛感していたことが、次の言葉からわかる。

「ジョセフ・スミス・ジュニア大管長は祈りの後で評議会の会員を前に次のように語った。『耳の痛い話ではあるが、皆さんに大切な事柄をお話したい。私は経験からある

大切な事柄を学んだが、そのことを思い出すたびに、深い悲しみに襲われる。もしもこの業が始められてからの教義と義務に関する重要な決定の記録をすべて持っていたとしたならば、私は黄金を山と積まれてもそれを人手に渡すようなことは決してしないであろう。にもかかわらず私たちは、後の代のために価値がないと思い込んで、これらのことを記録することを怠ってきた。」(Teachings of the Prophet Joseph Smith「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.72)

教会が王国の業に関してその記録をつけることは、明らかに必要なことである。一方、私たち自身の王国の記録をつけることに関して、ジョン・A・ウィットソー長老は次のように記録している。「この記録を家族の聖壇の礎石として備え、家族全員がこれを知って、活用できるようにすべきである。子供たちが成長して、やがてそれぞれの家族を持つようになった時、彼らが最初に持つべきものは自分の家族の記録である。そしてこの記録を生涯書き続けて家族の記録とする。同じ記録が二重に作成されても別に差しつかえない。先祖に関する話や彼らの名前、生きていた頃の世の中の様子、および彼らの生活や業績の記録が手元にあってしばしば活用できるということは、私たちにとって喜びであると同時に、靈感と力の源でもある。私たちはそれぞれ自分の記録をつける責任があり、その責任を完うしなければならないのである。」(Church News「チャーチニュース」1943年10月31日付)

ウィットソー長老やその他の主の僕たちが提案しているこの種の記録は、賢明な両親の手中にあって、その子供や孫を教える非常に有効な道具となる。しかしどのような記録をどのようにして残したらよいのだろうか。

ほとんどの人は、個人の記録、家族の記録、覚えの書、日記、貴重な体験の記録、財政記録など、各種の記録についてこれまで耳にしたことがあると思う。しかし正しい見通しがないと、量が多いので負担に感じるだろう。

1. スペンサー・W・キンボール大管長は、教会の青少年に対して、日記をつけることの大切さを強調している。大管長は、日記にどのような事柄を記すべきかを念入りに説明し、次のような言葉で結んでいる。

「日記帳かノートを手に入れ、日常の出来事を記録しなさい。そしていつまでもそれを保存しておきなさい。恐らく天使たちはあなたの記録を読み、永遠にそれを活用することであろう。きょうからこれを始めなさい。あなたが訪問した時の経験、あなたの家を訪れた人、深く考えていること、成功と失敗、交際している人々、心に感じていること、証を記録しなさい。救い主は、大切な出来事を記録しない人々を罰したもうことを忘れないでいただきたい。」

(IIIニーファイ23:7-13参照)

2. 日記は、私たちの生活を記録するひとつの手段にすぎない。昨年および今年の第2四半期ステーキ部大会にお

いて、もうひとつの記録、すなわち個人の歴史をつけることの大切さが強調された。多くの人が、両親、祖父、曾祖父などに関する資料を探し求めているが、一般には世代が離れれば離れるほどその人々の生活に関する情報は得にくいようである。私たちは子孫に同じ挫折感を味わわせてよいものだろうか。

子孫に同じ誤ちを犯させてもよいものだろうか。福音に対する私たちの証や、その証を得るに至った出来事について、子孫に伝えたいとは思わないだろうか。

私たちはすでに、個人の歴史を編さんするのに必要な多くの情報を得ている。すなわち、日記や年間計画表、歴史記録または個人の記録、スクラップブック、写真、録音テープ、教会活動の記録、手紙など、数多くの資料から情報入手することができる。今私たちが行なわなければならないのはただ、これらの資料を系統立て、人生における重要な出来事、特に子孫を教えるのに役立つ出来事を要約した、個人の歴史記録を作成することである。現在までの個人の歴史が完成したら、あとはそれを読み直し、定期的(2,3年ごと)に最新の情報を記入するようにすればよい。

中には書くことが不得手で、書くよりはテープに収めた方がたやすいという人もあるだろう。この場合には、後で子供や伴侶や、その他だれかに、収録したものを書き取ってもらうようにすればよい。

個人の歴史に記入する出来事を思い出すための効果的な方法がある。まず小さなカードをたくさん用意して、各カードに誕生から現在までの自分の年齢を順に記入し、それを2週間ほど持ち歩く。そして何かを思い出す度に、該当する年齢のカードにその出来事を書き留めるという方法である。時には何歳の時のことかはっきり思い出せない場合もあるが、そのような時には「学齢前」とか「小学校時代」とか、該当する期間に分類して記しておく。こうして準備したカードに基づいて個人の歴史を作成するのである。

家族を組織立て、先祖についてさらに多くの事柄がわかってくると、その先祖の体験した事柄の一部を家族の歴史に入れたいと思うだろう。これにはいろいろな方法がある。家族の歴史の中に加える方法、あるいは各個人の歴史として家族の覚えの書に入れる方法など。なおこれらの歴史は、家族がそれぞれ個人の歴史を作成する時に参照できるようにする。また、家族の記録の編さんは全員が協力して行なうようにする。

3. 長い間、覚えの書は家族の歴史であると言われてきた。さらに系図表、家族の記録、および個人の記録をまとめて覚えの書とするように強調されてきた。系譜を調べ、また神殿儀式のための名前を提出する際に、これらの記録はすべて大切であるが、しかしこれらが古代の「覚えの書」の意味する事柄をすべて含んでいるとは言えない。

モーセ6:5-6には次のように記されている。

「ここに一部の覚えの書誌さる、その中に誌すところは

アダムの言葉にてなり。そは靈感の『みたま』によりて書き誌すために、神を呼び求めたる者にみな与えられたればなり。

この者たちによりて、その子供たちは読み書きを教えられ、その言葉は清くして汚れなかりき」

「アダムの時代に神を呼び求めた」人々は、子供たちに読み書きを教えたが、彼らはその責任を果たすために、靈感の「みたま」によって書き記されたものを用いていたようである。しかし、表を用いただけでは、この責任を完うすることができなかったのではないだろうか。当時の覚えの書には、現在私たちが書き入れている以上の事柄が盛り込まれていたに違いない。

家族の歴史の一環として、私たちは、神が家族一人一人にどのように手を差し伸べてこられたかを、靈感の「みたま」によって記した記録として書き留めなければならない。標準聖典に見られる真理を証するものとして、家族各人の得た体験を活用しながら、啓示、什分の一、断食、祈りなど、偉大な福音の原則を家族に教える時に、家族の記録が人生にどれほどの影響を及ぼすか、想像してみていただきたい。また、これらの神聖な家族の記録を、家庭の夕べやそのほか福音の真理を具体的に教える場で多々利用できることも心に留めていただきたい。

私たち家族は、3穴のバインダーに、以下の項目から成る直系家族の神聖な経験を記録したものをファイルしている。

1. 家族一人一人の祝福文
2. 教会のいろいろな責任に任命された時に与えられた祝福を要約した記録
3. 病気やその他、助けの必要な時に与えられた祝福を要約した記録
4. 幼児の祝福、確認、または神権への聖任の際に与えられた祝福を要約した記録
5. バプテスマやそのほか、重要な出来事に際して受けた各人の印象
6. イエス・キリストの福音に対する証
7. 神聖な記録として残しておきたいその他の経験の記録

子供たちはいずれもこの記録を非常に大切にし、しばしばこれを読んでいる。また私たちは、必要であると感じたら、いつでも家庭の夕べでこの記録を利用している。例えば、昨秋バプテスマを受ける準備をしていた娘のケリーの最も大きな助けとなったのは、3年半前にバプテスマを受けた姉のジェイミーの記録であった。私たちは彼女の経験を引き合いに出して、どのような準備をすればよいかをケリーに教えることができた。ジェイミーの記録に啓発されたケリーも、バプテスマの時に受けた気持ちを記録に残したのであった。

私は高等評議員に任命された時、クレランス・D・サミュエルソンステークス部長から特別な祝福をいただいた。そ

こで私と妻は任命後、思い出す限りの祝福の言葉を書き留めておいた。そのかいあって、その後長い間、ステークス部長から与えられた約束を記憶に留めることができ、またその約束の多くが成就したことを皆さんにお伝えしたい。

写真、スクラップブック、手芸品、家具、その他の記念品は、私たち自身の、あるいは私たちの先祖の体験した神聖な出来事を思い起こす貴重な品々と言えよう。これらの品々を見て貴重な出来事を思い出したならば、それもまた家族の記録に書き留めておくべきである。

記録の方法は様々であり、その形式もいろいろある。しかし、記録は人が考えるほど面倒ではない。従って、主は予言者を通じて私たちに、人生における重要な出来事を記録するよう命じられたのである。主はモルモン経の予言者、特にニーファイを通して記録の形式を明らかにしておられる。I ニーファイ 9 : 2 - 3 には次のように記されている。

「さて、私が前にこの版について話をしたように、これは私の民の歴史を完全に書き記す版ではない。……

しかもなお、私は私の民の教務について記事を彫り書く特別な目的でこの版をつくれと言う主の命令を受けている。

またほかの版には諸々の王の治世と、わが民の戦争、不和の記事を彫り書けと命じたもうたから、この版は大体教務について話し、ほかの版は大体諸々の王の治世とわが民の戦争、不和について記すつもりである」

ニーファイが小版に霊的な経験を記し、大版にその他のあらゆる事柄を記したように、私たちも記録を分類することを考えるならば、どの記録をどこに記すべきかを賢明に判断することができるであろう。

家族の長である私たちは、以下の事柄を考慮し、王国の記録として何をどのように記すべきか判断する必要がある。

1. 子孫にとって最も大切な事柄は何か。
2. この記録が人生にとって重要なものであることを子孫に印象づけるためには、どのような形式にしたらよいか。
3. 記録を集める場合、自分ひとりの力でどの程度までできるか。
4. 私の王国は神の王国を小規模にしたものであることを考えた場合、主の記録にならって自分の記録をつけることは、どの程度大切なことだろうか。
5. 主は私に何を望んでおられるか。私は、天父が御自身の王国の初めからの記録を必ず持っておられると信じている。私もまた、天父にならって、今も永世にもわたる子孫のために、自分の王国の初めからの記録を残して彼らに伝えたいと願っている。

(ジミー・B・パーカー 教会系図部資料担当主任を務める傍ら、ユタ州バウンテフル・ウエストステークス部バウンテフル第5ワード部アロン神権ディレクターの責任にある。)

個人の歴史

十二使徒評議員会会員 ボイド・K・バッカー

系図探求は、全力を注ぐ人もいれば、他方全く怠る人もいるというように、人の気持を大きく二分するもののである。しかし系図探求は、すべての末日聖徒に与えられた責任である。従って私たちは、他にいかなる召しや責任を受けていても、系図探求の責任を立派に果たすことができるのである。

末日聖徒は復活を信じている。また、生者の場合と同様、死者にもバプテスマが必要であることを知っているはずである。生者と死者のいずれにとっても、バプテスマの大切さに変わりはない。さらに、バプテスマはひとりずつ、しかもこの世で受けなければならない。従って死者のためには、生者がこの世で身代りに受けることになる。

新約聖書の中心テーマは主の復活であり、万人が復活することを私たちに教えてくれる。従って、この世に住む人々への伝道活動に関する聖句や言葉はすべて、死者のための儀式を施す業にも適用されるのである。

この業を行なうにはひとつの方法があり、また始める場所がある。それはあなたから始めることである。あなた自身のことと、あなたが現在持っているものから始めることである。大切なのは、まず始めることである。何から始めたらよいかわからなければ、あなた自身のことから始めなさい。何をどのように記録すればよいかわからなければ、あなたの持っているものから始めなさい。自分の生涯について書くのは大して時間を要しないし、記録が手元にあるので正確に書けることだろう。

一度書き始めると、興味がつのり、楽しくなるものである。

かつて私たち夫婦は話し合って、種々ある記録の整理を行なうことにした。しかし、私は教会の責任上、世界各地を旅行しなければならず、また大勢の家族に対する責任と、家の内外の片付けの仕事をかかえ、あまり時間の取れない状態にあった。そのことで私たちの心は安まらなかった。そこで、もっと時間を生み出すようにしようと、夫婦で話し合ったのである。

クリスマス休暇の時、私たちは少し時間を取ることができた。それで、記録の整理を始めた。その後、休暇を終えて平常のスケジュールに戻ってから、私たちは毎朝1、2時間早く起きることにした。

私たちは家中の記録という記録をすべて集め、整理を始めた。すると驚いたことに、数週間で考えてもみなかったほ

ど多くのことができたのである。しかし、その中で特に印象深かったのは、その間にいろいろな経験をしたことである。私たちは導きを得、また幕のかなたに、私たちの行なっていることに関心を持っている方々のいることを知った。こうして万事が順調に進んだのである。

各地の教会を訪れ、特にこのことに関して様々な話を聞いたことで、私の証はますます強くなってきた。他にも、自分の記録を集めて私と同じような経験をしている人が大勢いる。あたかも私たちがこの業を始めるのを、主が待っておられるかのように。

私たちは長い間捜していた写真や記録や記事を見つめることができた。しかも、案外容易に手に入ったのである。そればかりでなく、全く予期せずいろいろなものが見つかった。家族のこの探求が神の靈感によるものであることを、私たちは自らの体験によって知ることができた。また、靈感は行動を起こす者に与えられることをも知ったのである。大切なのは、まず始めることである。

いったん始めると、時間がとれた。しかも、他のすべての責任を果たすことができたのである。その業のために私たち夫婦は多くの靈感をいただいて生活することができたのであった。

決心するのは私たちである。主は私たちの自由意志を無視されない。系図と神殿活動について証を得たければ、何か行動を起こさなければならないのである。

この業を始めれば、主はあなたを祝福して下さるであろう。私たちの場合がそうであった。私たちの現状を踏まえて、私たちの持っていたものから始めようと決心した時から、数多くのものが手に入った。私たちは系図探求の専門家ではないが、家族のために時間をさいてこの業を遂行するのである。私たちがそれぞれ自分の現状を踏まえて、今持っている記録から始め、それを整理するならば、必要なものが備えられるであろう。これが私の証である。



どの女性にも扶助協会が必要である

マーク・E・ピーターセン長老

この世は恐るべき勢いで力を増している。それは背徳や腐敗に限ったことではない。今や福音を受け入れ、実践する私たちに対抗して、世の思想やイデオロギーが多くの人々の心を捕らえつつある。

私たちは、教会指導者の控え目な勧告よりも世間の知恵をあまりに受け入れがちである。

今こそ私たちは、神が人生の指針としての福音を回復して下さったことを心にとめなければならない。福音が教える生き方とは、とりもなおさず神の生き方なのである。

予言者ジョセフ・スミスが教会を組織設立した時に、女性の組織である扶助協会が含められた。私たちはそのことの意義を認識しているだろうか。

偉大な回復者ジョセフ・スミスの手によって、回復された教会の一部となった扶助協会は、教会の形成期にノーブーで教会の婦人たちに与えられた組織である。それは緊迫した必要に応えることを目的とし、しかも後世まで続くように意図されたもので、特定の目標を持っていた。例に取れば、

1. すべての末日聖徒の向上をはかる。
2. 堅固な家庭を築く。
3. 夫婦の絆を堅固なものとする。
4. 末日聖徒の子女の育成への援助をする。
5. 愛の奉仕を通じて黄金律を実践する。
6. 教会員社会を強化し近隣社会へ貢献する。
7. 各自の問題克服を目指す姉妹たちを教育する。
8. 広く豊かな生活を求めて純文学

その他文化を鑑賞する。

9. 妻、母として神と共に働くという神聖な務めを認識する。
10. モルモン女性は男尊女卑社会の中の劣等階級市民ではないこと、すなわち何ら制限を受けず、従って世界の大路に解放を求める必要のないことを認識する。

この扶助協会は、教会の女性たちに靈感によって神から与えられた組織である。そうであれば、末日聖徒の女性一人一人にこの組織が必要でないという理由があるだろうか。モルモンの女性のだれが、扶助協会に対して「私には必要ない」と言えるだろうか。

扶助協会は、末日聖徒のあらゆる女性の幸せに欠くことのできないものである。いやそれどころか、扶助協会を抜きにしては末日聖徒のすべての家庭の幸せはあり得ない。そうでなければ、なぜ全能の神が扶助協会を近代の神の王国を構成するひとつの要素として加えられたのだろうか。

扶助協会のプログラムは家庭全体の利益となるものである。家族全員が扶助協会を支援し、姉妹たちが全員参加できるように応援していただきたい。子供たちは母親に、扶助協会に出席してより良い母親になることを学んでほしいと思うはずであり、またこの父親も、妻たちがこの優れた組織の一員となることを真剣に望むはずである。夫たちは、家事が上手になり、家庭の雰囲気をもっとなごやかになり、家計の切り盛りがうまくなるので都合が良いから出席してもらいたいと、少々勝手ながら思うことであろう。しかし何よりも父親たちは、扶助協会に出席することによって、回復された神の王国

の祝福の中で扶助協会を通してしか得られないものを家庭に持ち帰ることができるのだということを考えて、出席を援助していただきたい。夫や父親はひとり残らず、妻たちの扶助協会への出席を支援しなければならない。それは各家庭にとって、それこそ「欠かすことのできない」ことであるはずである。

大勢の女性が扶助協会に出席していない。彼女たちは扶助協会で得られる機会をまだ理解していない。扶助協会が、現代の女性たちが持っているさまざまな問題を克服して行くための助け手として存在することを、まだわかっていないのである。

彼女たちは、回復された福音の完全な意味をまだ理解していないであろう。それは非常に残念なことである。なぜなら心から主に仕え、主の恵みを受け、恵みによって平安を得ることができるのはただこの福音を通じてだけだからである。

扶助協会が主の御計画の一部であることを忘れないようにしようではないか。

扶助協会の宣伝する人になりなさい。そうすることにより、あなたは大量の人によってシオン山の救い手となるであろう。神の目から見て、人間はすべて価値ある存在である。家族も同様である。女性たちを扶助協会に誘う時、それは彼女たちの家族全員に救いをもたらすことにもなる。

姉妹たち、人を救い、家族を強くする一手段として、すべての女性を扶助協会へ導くことに努力しようではないか。

初めて知った母

ウォンダ・W・バジャー

母は私がまだ6歳のときに亡くなり、どんなお母さんか知りたいという思いがいつも胸を離れませんでした。特に十代の頃はそうでした。母がどんなことをしていて、どんなふうにデートをし、どんな服装をしたのか、日曜学校で教えたことはあるかどうか（当時自分がその責任を受けていました）などを知りたいと思ったものでした。それで私は18歳の時に、将来自分の娘が18歳になった時に私の生活がわかるように、娘あての本を作りました。

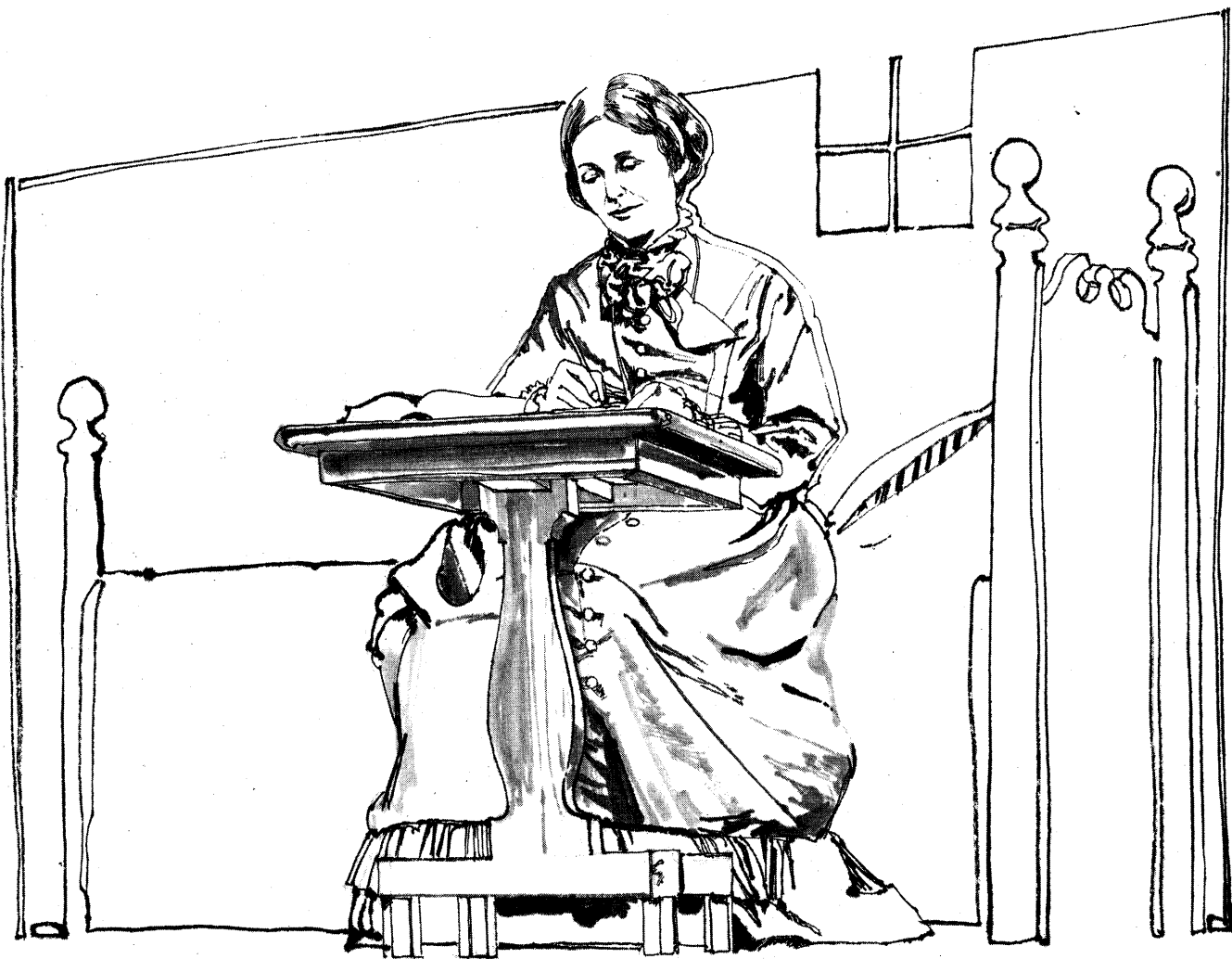
その後、結婚して何年かたった時に、母方の祖父から1冊の小さなノートをもらいました。それは1917年に高校を卒業した時から始めた5ヵ月分の母の日記でした。ようやくのこと、まして人づてではなく、母自身の考えや気持ちを

自分の目で読んで知ることは、どんなに感激だったことでしょう。母が毎日どんな生活をしていたのかよくわかりました。2年前に母（私の祖母）を亡くした母は、家中の掃除、洗濯、料理をひとりできりもりしていました。

でも、時間を見つけてその他のこともしました。5ヵ月で24本も映画を見ています。デートのこともわかりました。グレートソルトレーク湖の岸辺のサルテアリゾートに行くのが楽しみだったこと、日曜日の午後はソルトレーク・シティのリバティーパークを散歩したこと、毎週熱心に日曜学校で教えたこと。

それから1975年の秋に、私のいとこがカリフォルニアから叔母のアルバムを持ってやってきたのですが、そこに母の写真がたくさん載っていました。私の願いはかないませんでした。母はどの写真でもにっこり笑っていました。母の服装と言えば、ベルベットのスカートにリボンのブラウス（リボンの縁飾りです）、それに、花をつけたつばの広い帽子をかぶっていました。

そのような写真を見て、母の書いたノートを何度も読み返すと、母がとても近くにいるような気持ちになります。今度母に会うときには、遠い人ではないだろうと思います。





祖父のプレゼント

ブルース・ライマン・ビショップ

目を覚ましたアルバート・ライマンと彼の父親は、馬の姿が見えないのに気づいた。ふたりは放牧していた牛を追って来たのだが、夜の内に、乗ってきた馬が逃げてしまったのである。どの町からも150キロは離れている。歩いて戻れるだけの食糧はないし、馬を捜すか平原で死ぬかのふたつにひとつだった。

若くて元気だったアルバートは、父を残して馬捜しに出かけた。荒野を1日半、馬の足跡をたどって行ったが、のどがからからに渴き、休まずに歩き続けたせいで筋肉が痛んだ。ぼろぼろになったしかなかった革の靴は血でべったりと足に

張りついた。

アルバートはくたくたに疲れ、気もすっかりくじけてしまった。そしてもう帰ろうと心に決めた。

そのとき、ふと父の声がしたように思った。「頑張れ、アルバート。」父の声はこう言っているように聞こえた。「子供でもおとなと同じように立派にできることがある。今何ができるか考えてみなさい。戻れば負けだ。だが頑張れば、やれるだけのことはやったことになる。そうすればもう立派な一人前の男だ。」

アルバートは馬捜しを続けた。一足ごとに鋭い痛みが走

この素晴らしい人物の人柄が一層深くわかってきたのは、祖父の書いた日記を読むようになってからである。祖父の息子にあたる父が祖父の日記を読んで、こんなに苦労したとは少しも知らなかった、素晴らしい経験を沢山している、父は本当に立派な人だったと話すのを、私は聞いた。祖父は日記を通じて、私に福音の原則を説いている。彼は自分の父親に抱く大きな愛を美しく語り、見たことのない私まで祖父の父を愛する気持になる。

る。こうしてとうとうその夜、彼は馬を見つけたのである。

彼が自分の馬に乗り、父の馬を引いてキャンプした所に戻ると、父は道のかたわらの岩の上に立って彼を待っていた。アルバートが馬に乗って近づくと、父は岩からすべって下りた。そして2日間の捜索の話を聞きながら、アルバートの血に汚れた足を見、やつれた顔をじっと見つめた。

それから父親はアルバートを馬から下ろし、足が地面につくと痛むことを知って、彼を腕に抱えて岩の出っ張りにすわせた。そのときの父の言葉はアルバートの胸に焼きついた。「馬を連れ戻したおまえの苦労の方が、クレイビルに牛を全部連れて帰れることより、父さんにはずっとありがたいよ」

アルバート・R・ライマンは私の祖父である。この曾祖父の言葉は、祖父の日記に書いてあったものである。私の祖父は13歳の時から日記を書き始めた。最後の日付は93歳で死ぬ数日前である。

祖父が生きていた頃、訪ねてくると昔話や歌やお祈りや証をどっさり聞かせてくれた。祖父はユタ州のブランデンブからソルトレーク・シティにやって来ては、うれしそうな孫たちを見て目を細めていた。インディアン英雄や恐れ無法者の話、サンジュアンのメーサで迷子になった少女を、お祈りして捜した開拓者の話、自分の両親を愛していることや、主と福音を愛していることを、私たちに話して聞かせてくれた。

しかしこの素晴らしい人物の人柄が一層深くわかってきたのは、祖父の死後、祖父の書いた日記を読むようになってからである。祖父の息子にあたる父が祖父の日記を読んで、こんなに苦労したとは少しも知らなかった、素晴らしい経験を沢山している、父は本当に立派な人だったと話すのを、私は聞いた。祖父は日記を通じて、私に福音の原則を説いている。彼は自分の父親に抱く大きな愛を美しく語り、見たことのない私まで祖父の父を愛する気持になる。

彼はいつも心の内をそのまま書いていた。気丈な人で、不幸も彼にかかるとちょっとした障害でしかなかった。日記に、「苦労を嘆くより、苦労から何も学ばないことの方を嘆くがよい。苦労も貧乏も失望も辛い仕事もいつときだが、良きにつけ悪しきにつけ、その影響はあとあとまで残

る」と書いている。

その信条が生涯で一番の試しにあったのは、8歳の息子が事故で死んだ時だった。祖父はそれまでたくさんの葬式で、「人は不死不滅だと証して、その証で慰めを与えようとした」が、中には、自分のことだったらああは言えないだろうと思っている人たちがいた。そのことを知っていた彼は、そうした疑念に対してこう決心した。「自分が不幸にあった時でも皆の前で証を述べよう。そうすれば私の話したことが本当だったとわかるだろう」

しかし自分の息子が死んだ時には、福音の計画を知りながらもさすがに悲しさがつのるらしく、こう書いている。

「心底悲しかった。話すこともできないほどだった。ただ泣きたかった」

葬式で、彼は必死の思いで痛哭の話を口を開いた。すると「はっきりした確信を感じ、霊界の存在と、人が確かに不死不滅なものと、主が子らになさることにすべて正しい目的があることを断言した。一步も引かぬ確信で話すことができて、私はつかの間でも悲嘆から喜びに引き上げられた」

祖父の堅い確信、家族に対する愛、救い主への献身は皆日記に記録されていて、時折私たちをも悲嘆から喜びへ、恐れから信仰へ引き上げてくれる。死んで久しい今も、祖父の腕は自分が何年も前に見つけた道を歩む私たちを導いてくれる。彼が自分の力で見出し、喜びの終着地まで進んだその道を歩む私たちを。

祖父は死ぬ前に、次の世に行けるのはうれしい、父親が待っていて自分を腕に抱き、共に福音を愛して一緒に喜びの涙を流すことを知っているから、と私たちに言った。

そして祖父はこう言った。「次の世でお前たちに会えるね。お前たちがこの世を離れる時にまたうれしい再会ができるんだ」

来世で祖父と会ったときに、天父の王国に入る資格がもし自分にあったなら、いくらかそれは紙の上にインクで残された祖父のあの日記のおかげであろう。そしてそれは、私たちもこの世を去る時に携えて行くことのできる豊かな遺産なのである。



小さな
お友だちへ



予言者の力

キース・クリステンセン



11 さいのジョンは、オランダのロッテルダムに住んでいました。そのころ、ジョセフ・スミス大管長がヨーロッパの聖徒たちを訪れることになっていました。

ところがその数日前、ジョンは病気にかかり、目が見えなくなってしまったのです。スミス大管長が到着する前の夜、ジョンはお母さんにこうおねがいしました。

「お母さん、ぼくを大会に連れて行って。この目を大管長に見てもらえば、きっとよくなるよ。」

「ええ、いいわよ。でもスミス大管長はお忙しいから、あなたのところに来てくれるかしら。」

次の日、何百人もの聖徒がスミス大管長の話を聞こうと集まりました。集会の後、スミス大管長はみんなとあくしゅをしていました。

ジョンは自分のばんが来るのを待ちながら、予言者はきっとぼくの目を見てくれると思いました。そしてその通りになりました。予言者はジョンの目を見て、しゅくふくしてくれたのです。

それからというもの目はぐんぐんよくなり、今では前と同じように見えるようになりました。神のほんとうの予言者の力に心から感謝しています。

大切な第一歩

おはなし：ナンシー・アームストロング／え：クレイグ・フェッツァー



その日、トムはいらいらしながらぶたの番を
していました。一日が何と長かったこと
でしょう。この仕事を言いつけられたときはうれ
しかったのです。自分がおとなになったような
気がして。でもすぐにさみしさを感じるよう
になりました。

はじめのうち、トムは自分が騎士になり、て
がらをたてて英雄になることを夢見ては楽しん
でいました。しかし、かなわぬ夢だとわかると、
そう考えることにもあきてきました。

トムは、死んだお父さんと同じように、ルタ
ーワース村の牧師館のどれいでした。主人が解
放してくれない限り、死ぬまで働かなければな

りません。

小屋にわらを取りに行くと、監督者のジャッ
クが馬のせわをしていました。見なれない馬で
す。「だれの馬ですか」トムはたずねました。

「ウィクリフ学寮長様のだ。態度に気をつけ
るんだな。しばらくおとまりになるそうだから。
そうだ、トム、おっかさんが呼んでいたぞ。手
伝ってくれって。」

トムはためいきをつきながら、わらを運びま
した。これでまた仕事がふえるな。それにして
も、大学で教えているウィクリフ様が、どうし
てこんなところに住むんだらう？

台所の戸を開けると、暖かい空気とおいしそ

うなにおいが流れてきました。「トム、いい子だから、肉のくしをまわしておくれ。お母さん、忙しいんだよ」

くしをまわしながら、トムは自分もいっしょに焼かれているような気持ちになりました。手はいたくなるし、おなかはグーグー鳴るし。お客様が食べ残してくれればなあ、とトムは思いました。

「トム、これを二階に運んで、配っておくれ。」お母さんはお皿を運びながら言いました。

「ウィクリフ様は大学の方はどうしたの？」トムはききました。

「おやめになったのさ。」お母さんは小声で言いました。「ジャックはね、ウィクリフ様の宗教についてのお考えがまちがっているからだって言ってたけれど、そうじゃないね。ウィクリフ様は私たちのように学問のない者でも福音がわかるようにしたいっていうのを聞いたことがあるからね。」

しばらくして、トムは夕食を食べながら、二階で耳にはさんだことを考えていました。「お母さん、ウィクリフ様は聖書をラテン語から英語に訳しているんだって。信じられる？それにこう言ってたよ。『農夫が救われることは、王が救われることと同じように大切だ』って。」

「確かにそうだね。神のみ前では、すべての人は平等だからね。だけど人の前ではそうじゃないね。」お母さんはこう答えました。

「だけど、英語の聖書ができて、ぼくたちに読めなかったら、何にもならないね。」



「英国人なら読めるさ。そしたら読んでもらえばいい。」お母さんは言いました。

「ぼくでも読めるようになると思う？」トムはききました。

「まずむりだろうね。」お母さんは悲しそうに答えました。

トムの目にはみるみるうちに涙が浮かびました。そして台所から飛び出して行きました。

次の朝、トムが書斎^{しやさい}に火をともしに行くと、黒い衣をまとったウィクリフ様が机に向かっていました。トムには羊皮紙の上を走る羽ペンの音が聞こえましたが、ウィクリフ様はトムに気づかない様子でした。

何日かすぎたころ、トムは、火をともしに行く時間には、その部屋にはだれもいないことを知りました。そして、ある朝トムはろうそくを

つけて、羊皮紙を照らしました。そこには何か書いてありました。トムには黒いしみにしか見えませんでした。それが文字であることは知っていました。そのとき「イエス」という文字が目に入りました。この字は、教会のキリストの像に刻まれているのを何度も見ていたので、よくわかったのです。

床には羊皮紙の切れはしが落ちていました。トムはそれを拾い、「イエス」と何度も何度も書きました。ひとつ書くたびに、トムの顔はほころびました。あまり熱中していたので、ウィクリフ様が入って来たのに気づきませんでした。ですから、肩ごしに「じょうずに書けたね」と言われたときにはびっくりしてしまいました。

トムは顔をまっかにして、どもりながら言いました。「ごめんなさい。ウィクリフ様、すぐに火をつけます」

トムがだんろの方に行こうとすると、ウィクリフ様がトムの手を取りました。

「君の名前は？」

「トム・ブリントンです」

「書き方がわからないようだね」

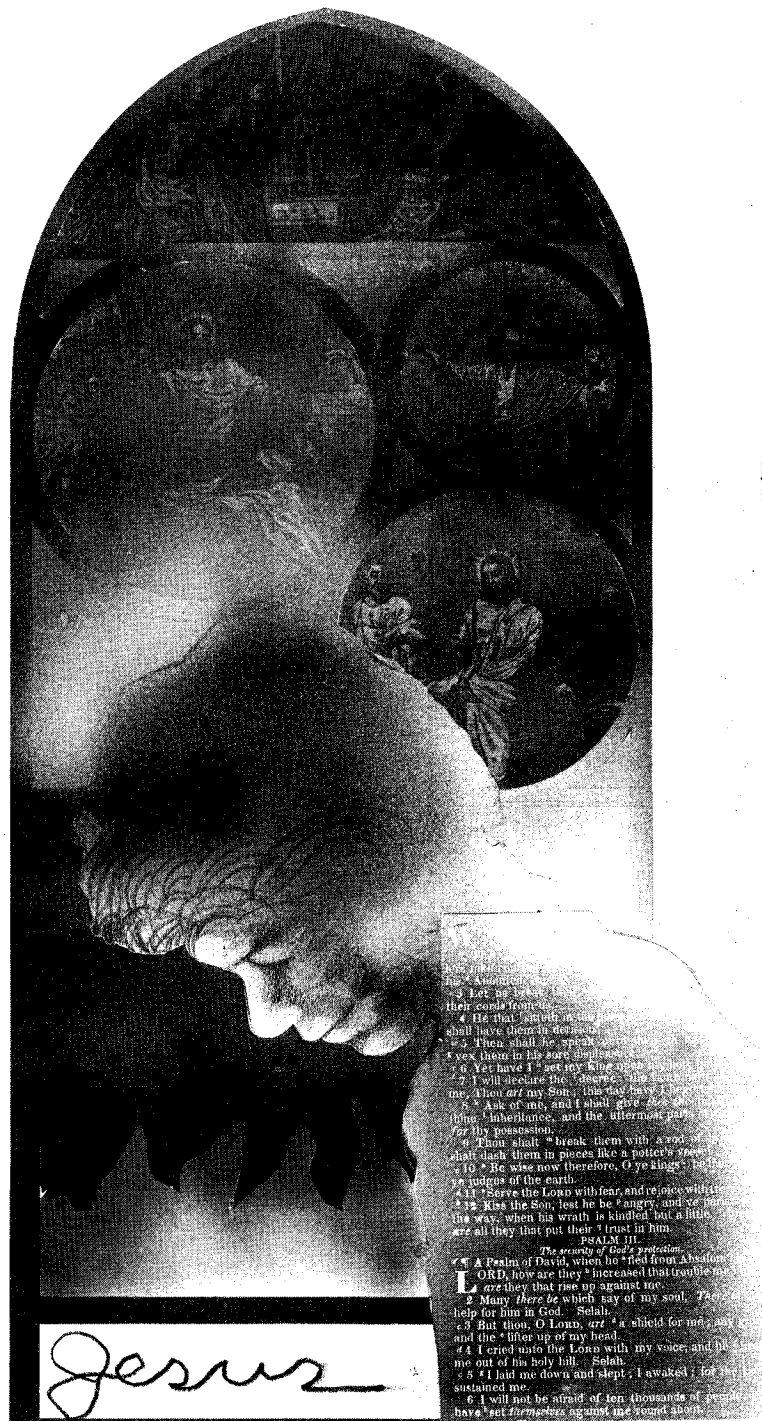
「ええ、まねて書いていただけです」

「読み方は知っているのかね？」

「いいえ」

この老人はトムの悲しそうな顔をのぞきこんで、こう言いました。「読み書きを勉強したくはないかな」

トムは老人のしぼんだ目を見つめながら答えました。「ええ、したいです。でも、ぼくはぶ



た飼いです。すみません。もう行かなくちゃ。

遅れると、主人に打たれますから」

「私がいっしょに行って、主人に別のふた飼いをさがすように言ってあげよう。今日から君は村の学校で勉強を始めなさい。聖書を書き写すために大勢の助けが必要なんだよ」

トムはおどろいて言いました。「では、ぼく

が読み書きできるようになれば、神のみ言葉を
書き写させてくださるのですか。」トムにとって
は信じられないことでした。「そうだと、人
々は聖書を求めているからね。でも大勢の牧師
たちは人々が聖書を読む必要はないと言ってい
るんだ。だからこの仕事はとてもきけんなもの
なんだよ。」

本と石板とチョークにうずもれたトムにとっ
て、幸福な月日が流れました。こうしてトムは
ついに羊皮紙にペンを使って書けるようになり
ました。ウィクリフ様は牧師館の大ホールを使
って、少年たちに聖書を写させていました。

クリスマス・イブの時、赤々と燃えるだんろ
のある部屋で少年たちはウィクリフ様から、イ
エス様の降誕の話を聞きました。英語で、これ
ほどすばらしい話を聞いたことはありませんで
した。

トムが部屋に残っていると、ウィクリフ様が
「だんろのそばにおかけなさい、話したいこと
がある。」と声をかけました。

トムが近づくと、ウィクリフ様は机の上の羊
皮紙を取り上げて言いました。「今、とてもめ
んどうなことがある。それは私たちが行なっ
ている仕事のことだ。一般の人々に英語の聖書
を読ませるのはまちがっていると言うのだ。教会
はこの世の欲でいっぱいだ。私は人々に、救い
主イエス・キリストを信じた最初の人々のよう
な生活をし、信仰をもってもらいたいと思っ
ている。しかし、聖書を読んで、理解しなかつ
たら、それができるだろうか。」

ウィクリフ様は深くため息をついて、羊皮紙
をトムに渡しました。「これは君と君のお母さ
んへのクリスマスプレゼントだ。」

トムはそれを読んで、おどろきました。それ
には、トムとトムのお母さんがどれいの身から
解放されることが書いてあり、ウィクリフ様の
認印が押してあったからです。「どうして、こん
なすばらしいおくり物を。」

「聖書を写してくれたほかの少年たちも自由
の身だ。めんどうが起これたら、にげてもとど
まってもかまわない。自分の好きにしろ。」

トムはまごまごして立ち上がりました。のど
がつまってことばがでませんでした。やっ
とこのことでこう言いました。「ぼくは、あなたが
必要としてくださる限り、決しておそばをはな
れません。決して。ぼくが写した聖書が、神に
ついて学ぶ人々にとって、大切な第一歩である
ことを、ぼくは知っています。」

ウィクリフ様はトムの肩に手をまわして言
いました。「この仕事に対する君の熱意は、私に
とって何よりのおくり物だよ。ありがとう。さあ、
行って、これをお母さんに読んであげなさい。」



日記をつけましょう

人々とわかち合うことのできる経験を、きょうから日記につけましょう。

予言者ジョセフ・スミスをはじめ多くの教会指導者が、日記をつけることの大切さを話しています。

ウィルフォード・ウッドラフ大管長は、1833年に教会員となってから、1日1時間を、日記をつける時間にあてていました。

「身のまわりの出来事を日記につけることによって、自分にも自分の子孫にも大きな祝福がもたらされる。子供もおとなも毎日日記をつけるように」とウッドラフ大管長は言っています。

日記は特別な出来事だけを記すものではありません。次にあげるような毎日の何でもない出来事、うれしいこと、かなしいことなどを書くことができます。

きょう、サッカーをした。

きょう、学校で海に住む動物の映画を見た。親友の洋平ちゃんが引っこして行った。またあえるといいな。

さあ、今日から始めましょう。日記をつけることによって信仰や証が強くなりますし、バプテスマなどの福音の儀式を書いておくと、いつかきっと役に立つときが来るでしょう。



家庭の夕べ

信一くんのおばあちゃんが山口家をおとずれると、みんなは家庭の夕べのじゅんぴをしていました。お父さんはレッスンで使う表を、お母さんはクッキーを作っていました。美代ちゃんは讃美歌をならべています。信一くんが部屋から小さいノートをもってきました。

「おばあちゃんが来てうれしいな。ノートにいろいろなことが書けそうだな。」信一くんは言いました。

「ノートって何？ 信一くん。」おばあちゃんがききました。

「家庭の夕べのノートだよ。ぼくは書記なんだ。その日の家庭の夕べのことをいろいろ書いておくんだよ。1月からずっとつけているんだよ。」

おばあちゃんはノートをのぞきこみました。「すごいわねえ。えっ、レッスンの後で、キャラメルコーンを作ったんだって。」

「そうだよ。」そしてふたりはページを

めくりはじめました。

「1977年1月。お母さんが病気なので、お母さんのベッドのまわりで家庭の夕べを開いた。」

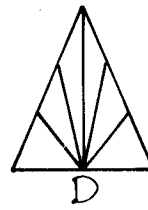
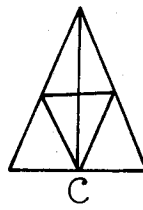
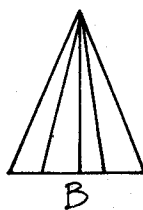
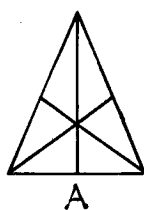
「1977年2月。今日の家庭の夕べはとても楽しかった。ぼくが弟であることをお姉ちゃんがあれほどほこりに思ってくれているとは知らなかった。おたがいに気づいているよい点について話し合った。ぼくはお父さんのボールの投げ方が気に入っていると聞いた。」

「1977年3月。今日は光男くんの家族を招待したが、光男くんのお父さんは、『またそのうちに』と言って来なかった。でも光男くんは来た。光男くんは家庭の夕べが気に入っているらしい。……」

ふたりはノートを閉じました。

「さあ、今日の家庭の夕べは楽しくなるね。だっておばあちゃんがいるんだもの。」
信一くんはこう言いました。

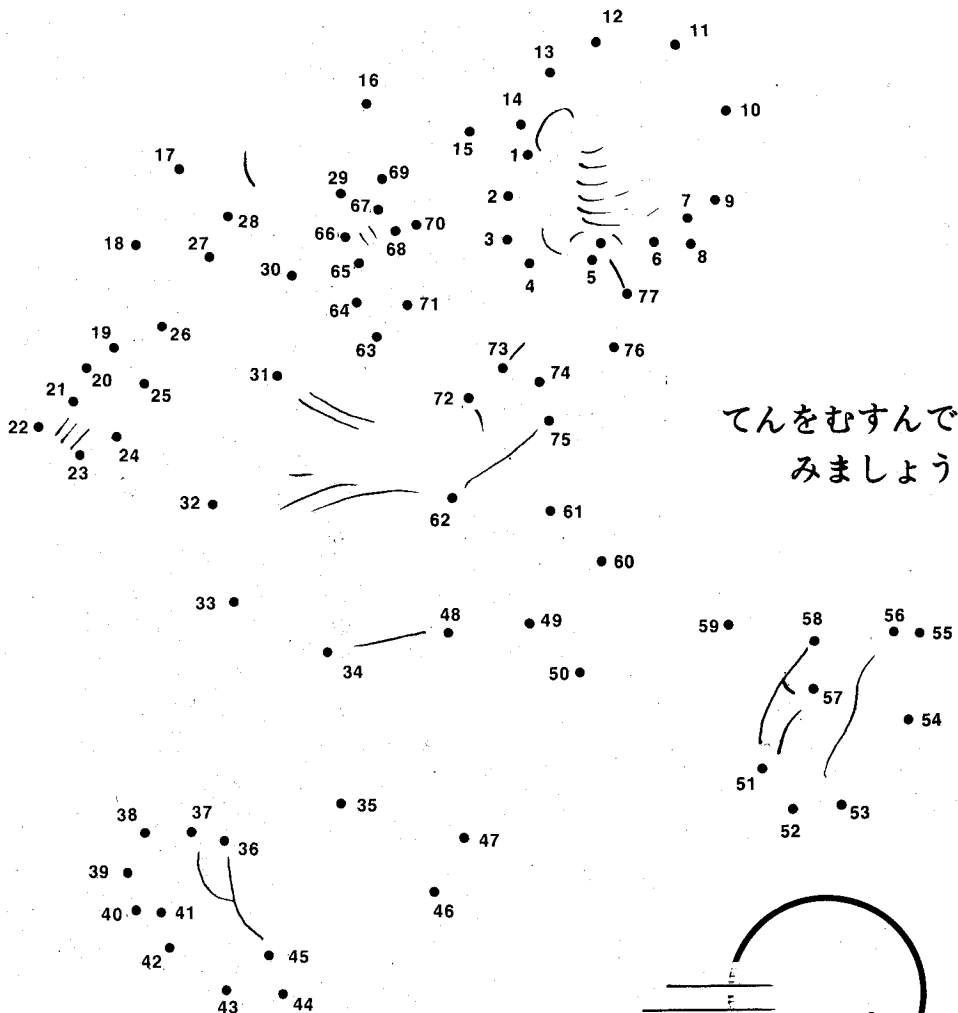
おもちゃ ばこ



三角形はいくつ？

ヘレン・R・サトラー

三角形の数がいちばん多いのはどれでしょう。



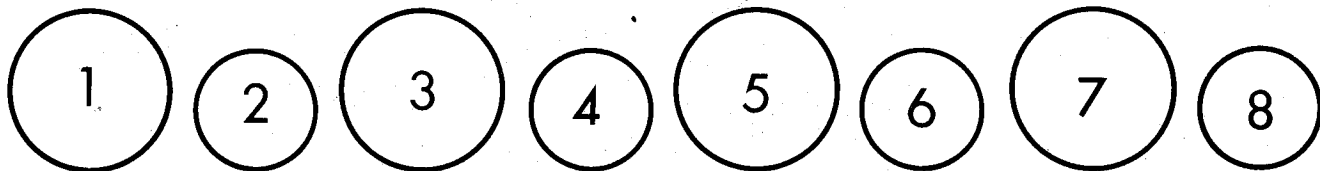
できるかな？

オルガ・C・ブラウン

直径2センチと1.5センチの円をそれぞれ4枚切ります。これを大小交互に1列にならべ、1から8の番号をうちます。

となり合ったものを一度に2個ずつ動かして、小4個と大4個の順になるように、ならべかえてみましょう。

てんをむすんで
みましょう



こたえ：2と3を8の右に動かす

5と6を2と3があったところに動かす

8と2を5と6があったところに動かす

1と5を8と2があったところに動かす

息子：お父さん、今朝、ぼく、メルケゼデク神権を受けることについて監督と話をしたの。そして監督から、神権を持つということはどういうことか、お父さんとよく話し合うように言われたよ。

父：そうか。じゃ監督に感謝しなくちゃね。神権はね、お父さんにとってとても大切なものなんだ。前にも神権について何度か話し合ったことがあるね。今日は、何から話そうか。何か特に質問でもあるかい。

息子：それじゃ、ぼくが神権について全く何も知らない

ことにしてよ。基本的な質問をするから、よく理解できるように説明してくれない。

父：いいとも。じゃ最初の質問は。

息子：まず、神権ってなあに。

父：簡単に言うと、神権とは、イエス・キリストの代理人として働くために委任された権威権能だ。

息子：でも、どうしてイエス様の代理人なの。ぼくたちは、天のお父様の代表者じゃないの。

父：全人類が父なる神の子供たちだということは、知っ

父と息子

神権についての対話

チョーンシー・C・リドル



てるね。

息子：うん。そしてイエス様もそのひとりでしょ。

父：その通りだ。しかし救い主には我々と異なっていることがある。人が皆、天のお父様と一緒に住んでいた頃、主は私たちの長兄だったんだよ。そこで、主は非常に特殊な責任を与えられたんだ。つまり、天父に選ばれて、この地球を組織し、天父の他の子供たちを住まわせ、治め、そして地球に来る者一人一人に、贖いを通じて祝福をもたらすという責任が与えられたのさ。残りの私たちには、そんな責任は与えられなかった。その責任は、ただひとりにしか与えられない特別な仕事だったからだよ。

息子：でも、主が何もかもおひとりでしなければならなくていいじゃないでしょ。

父：もちろんだ。主には、助けてくれる人が大勢いる。だからこそ神権というものが必要になってくるのさ。だが、救い主はその頭だ。この救い主に、天父は地球全般にかかわる責任をお与えになったのさ。天父は私たちを心から愛して下さっていた。だから、まずイエス様を送ってこの世界を創造し、次いでイエス様御自身をもこの世に送り込まれたんだ。苦しみと死を身に受けて、私たちを救うためにね。

息子：でも、どうしてイエス様が救い主選ばれたの。

父：お父さんにはわからない。だけど、ひとつだけ確信できることがある。つまり、天父がイエス様を代理人として選んだのは、イエス様が前世で、深く、純粋な愛を持っておられたからじゃないかということだ。イエス様は天父を愛しておられたし、天父の言われることには何でも従った。同時に、私たちに対しても純粋な愛を持っておられた。その愛が純粋であったために、そして利己的なところがいささかも見られなかったために、天父は、イエス様に地球のことを全部任せても心配ないと考えられたんだろう。

息子：ほかにもそういう純粋な愛を持っていた人はいなかったの。

父：いたと思うよ。でも天父の家は秩序の家だ。だから、



頭として指名されたのは、ただひとりだけさ。天父が人々に語りかける時には、決まって同じことしか言われなないんだ。「こはわが愛子なり、彼に聞け。」（ジョセフ・スミス 2：17。マタイ 3：17；17：5 参照）の一言だ。その戒めを守る人々は、地でも天でもイエス・キリストを通じてあらゆる祝福を受けることができる。だからこそ、救い主は、大いなる大祭司となられたわけだ。この地上で天父の祝福を受けるための、言わば唯一の窓口だね。私たちが受ける神権は、救い主の権能なんだ。そのために、「神の御子の神権の聖なる神権」（教義と聖約107：3 参照）と呼ばれているというわけさ。

息子：天父を代表する人が、どうしてただひとりじゃないといけないのかわかったけど、ひとつまだわからないところがあるんだ。ほかにも大勢、天父や他の人々を心から愛していた人がいたし、現に今でもいるでしょ。そういう人たちはどうなるの。

父：そういう純粋な愛を持っていた人々の中には、アブラハムが言ったような、高貴にして偉大な者たちが多くいたと思うよ。救い主は、そういう人々を、地上の統治者とされるんだ（アブラハム 3：22-23 参照）。

息子：でも、いろいろな時代の統治者たちを見ると、ちょっと信じられないな。

父：確かに、この世の統治者のことを考えれば、そうだろう。だけど、聖典にはどこにも王だとか、将軍だとか、大統領だとかは書いてない。救い主が言われる統治者とは、永遠の祝福を同胞にもたらしうことができるように主が指名した人々のことなんだ。彼らは神権者なんだ。

息子：つまり、救い主は、この世で純粋な愛を持っている人々を選び出し、その人々が他の人々を祝福できるように神権を授ける、と言うわけでしょう。その通りだとは思いますが、現在の教会を見ると、ちょっと信じ難いなあ。確かに神権者の中にはいい人がいるよ。でも、純粋な愛どころか、他の人々に大して愛を持ってないような人がいるでしょう。

父：ポール、人を裁くのはやめよう。しかし、お前の言うこともうなずける。正直言って、神権を授けられた人々が皆ひとり残らず神権者らしく振る舞っているかと言うそうではないね。

息子：でも、お父さんの話を聞いていると、人が救い主の神権を十分に行使するためには、完全でなければいけないと言ってるみたいじゃない。

父：大変なことのよう聞こえるかも知れないが、今お前の言ったことは、お父さんの理解の、ほぼ核心を突いているよ。救い主がユダヤで弟子たちに、どのような人になって欲しいか話された時、弟子たちは、絶望的になって、「では、だれが救われることができるのだろう」と言った。その時の救い主の答えが、唯一の希望だね。つまり、人は自分自身で完全になることはできないが、神には良いことでできないことはないと言えられた（マタイ 19：23-26 参照）。これで、お前の疑問の答えになるかな。

息子：つまり、人は神様の助けがなかったら完全になることはできない、ということでしょう。

父：その通りだ。聖典に、人がどんなに努め励んでも、救われるのはひとえに神の恵みによる、と書かれているのも、そういう意味があつてのことなのさ。（Ⅱニーファイ 25：23参照）

息子：別に悲観的になりたいわけじゃないけど、やっぱり、僕の知っている神権者の大部分が完全な愛を持ってるなんて、信じられないなあ。

父：ポール、大切なのは、完全な愛を持っていない人がいるという点じゃない。むしろ、完全な愛を持っている人がいるということの方が奇跡じゃないかな。これは、最初と最後を分けて考えれば、理解できるよ。

まず、最初と言うのはね、人はこの地上に生を受けただけでは、まだまだ賢くもなければ、完全でもない。とても救い主の完全な代理は務まらないし、純粋な愛を示して人々に祝福を与えることなどできるものではない。だから、救い主の代理が務められる人を育て鍛練する過程が必要になってくるわけなんだよ。

その過程の第一歩は、まず福音を受け入れることだ。自分の弱点を告白し、バプテスマで救い主と誓約を交わす。主のみ名を受け、そのみ名を常に忘れず、その戒めをすべて守るという、聖餐の祈りをささげる祭司が毎日繰り返すあの約束の言葉だね。

息子：ああ、その聖句なら暗記しているよ。でも約束するだけで十分なの。

父：いや、必要な第一歩には違いないが、それだけでは十分じゃない。バプテスマの時にその約束をすると、聖霊を受ける祝福、と言うか、聖霊を受けよとの戒めが与えられるわけだ。

息子：確認される時でしょう。

父：そうだよ。聖霊を受けることは、人に与えられる特権の中でも、最も素晴らしい特権のひとつなんだ。その影響で、救い主と同じように、思い、感じるようになるし、救い主からの指示も受けることができるんだからね。バプテスマのヨハネが、水でバプテスマを施したことは覚えてるね。そのヨハネは、救い主が施す火と聖霊のバプテスマというものがいかに崇高なものか、よく知っていた。だから、自分には、救い主のくつのひもを解く値打ちもないと感じていたんだね。私たちが神聖な神権を持つにふさわしく、また立派な人物になることができるよう助けを与えてくれるのが、聖霊の持つ、人を変える力なんだよ。

息子：それとアロン神権は、どう関係があるの。

父：ヨハネは、救い主が聖霊のバプテスマを施すことができるよう、弟子たちに備えをさせるために、水によるバプテスマを施しただろう。丁度それと同じように、アロン神権というのは、メルケゼデク神権を受けるための準備として与えられるものなのさ。執事の時には、聖餐を配ったり、断食献金を集めたりしたし、教師になった時には、ホ

ームティーチングを始めた。祭司になってからは、聖餐を祝福したり、伝道活動をしたり、バプテスマを施したりする特権を与えられた。これまで、監督と一緒にいろいろな仕事をしてきただろう。教会堂の環境整備や福祉農場での作業、それにワード部の人たちを助ける仕事などはそうだね。ところで、メルケゼデク神権を与えられるのは、どういう青年だい。

息子：祭司の仕事を引きちんとやってきた人でしょう。

父：その通りだね。外形的なことに勤勉で、忠実で、従順な青年なら、霊的なことを執り行なう十分な準備ができているはずだよ。そういう青年なら、19歳で伝道に出ても、すでに救い主に仕えるということではベテランだ。忠実な祭司の頃に培った態度や習慣は、これから先、大神権のいろいろな召しを受けるための基礎になるだろう。教会で、神権の権能の下に働き、聖きみたまの励ましに従って生活するようになったら、その時はもう、愛の業を喜んずることができる。ポール、これだけは忘れないでくれ。宣教師として働こうと、教会の補助組織で働こうと、あるいは、夫として、父親として働こうと、そういう神権の召しにおける本当の成功というのは、自分の利益を捨てて、どれだけ深く、また純粋に他人を愛し、関心を示したかによって決まるんだよ。

息子：それは、外形的なことも、きちんと効果的にしておかなければ、とても他人に愛を示せないということでしょう。

父：全くその通りだよ。怠け者でだらしなく、従順でない宣教師がいたら、そんな宣教師は、人に確信を与えるのがとても大変なはずだ。回復された福音は特別のものだなんて言えないからね。全然人の動きに注意を払おうとしない長老定員会の会長も、人を動かして、進歩させることはむずかしいね。それから、同じ父親でも、自分の家族を養うために一生懸命働こうとしなかったり、自分の楽しみを第一としたりするようでは、お世辞にも、家族を救い主のもとへ導いているなんて言えないね。

息子：アロン神権で学んできたことが、随分と役に立ってくるんだね。でも、アロン神権の果たす役割は、もっとほかにもあるんでしょう。

父：その通り。これまでは、ただ、純粋な愛というものの基本についてだけ話し合ってきたね。今度はその基本の上に、偉大な知識と熟練と知恵と、それに人々のこととその必要を理解してあげる能力とを加えていかなければならないんだ。これは皆、みたまの賜さ。自分の罪を悔い改め、そして、人に恵みをもたらすことに飢え渴いている人たちは、聖霊に満たされる。それから、そういう賜が注がれるんだ。

ポール、大切な聖句をちょっと眺めてみよう。教義と聖約の121章を開いてくれないかい。34節から最後の所までは、とても重要な箇所だから、神権者は是非暗記する必要があると思うよ。一語一句間違えなくなるまで、何度も何度も暗唱してみることだね。

34節と40節を見てごらん。召される者は多いが選ばれる者は少ないと書いてあるだろう。どうしてだろう。35節を読むと、この世に属けるものや人間の誉れを得ることを望んで、わき道にそれてはならないということがわかるね。神権の目的は、奉仕し、恵みをもたらすことにあるんだからね。

36節には、神権を行使するためには、天の力と結び付いていないといけないとある。これはつまり、神権を行使するためには、聖きみたまを受けていなければ、みたまの力も賜も受けることができないということだね。

37節では、世に属けるものに心を奪われると、聖きみたまは退き去るし、みたまが去れば、神権の権能も終わりだと書いてある。正直、真実、貞潔、慈善という、あらゆる善を行っていないければ、神権の権能を義しく適正に行使用することはできないんだね。

38節では、悔い改めようとしなない人たちが神権を行使する機会を失って、どれほど深い失望を味わうかが書いてある。そしてそういう人たちは、かえって神権者に挑戦的な態度をとるようになるものなんだね。

39節では、ほとんどの人が、神権を受けると、権力と支配力とで神権を行使しようとするとか書かれているね。純粋な愛の気持ちからではなくてね。

さて、40節を読むと、神権を持つ兄弟たちの中にも、愛を示しているとは思えないような人がいるといった先程の疑問に答えが与えられるんじゃないかな。悔い改めて、愛の業をする機会が与えられても、神権に聖任された人——ここで言う「召される者」だね——そういう人の大部分は、召しに応じて一生懸命働こうとはしない。だから、選ばれる者は少なしなんだ。その神権を永遠に保持する人は少ないだろうね。

人は、完全だから福音を受け入れて救い主の教会に入ることではないことはわかるだろう。むしろ、完全になるために教会に来るんだ。同様に、人は、救い主のようであるから神権を受けるのではなく、むしろ、救い主の業をすることによって、救い主が現在あるような状態まで成長できるように神権を受けるわけだ。救い主は偉大な愛をもって、私たちと共に働き、王国で召しを受ける度に一步步成長できるよう、私たちを助けて下さるんだよ。確かに、主は、神権者が道をそれたり、永遠の生命よりもこの世に属けるものの方に重きをおいたりすると、悲しまれると思う。

ところで、なぜお父さんが、最初と最後には違いがあると言ったのか、わかったかな。みんな、最初にはふさわしくないんだが、成長を続けて最後にはふさわしくなる人もいる、ということだね。

息子：お父さん、僕は、救い主に仕えて、他の人々に祝福を与えたい。でも、絶対に道からそれないようにするためには、どうしたらいいの。

父：一番良いと思うのはね、ポール、毎日、主に助けを求めて祈り、それから、鉄の棒を固く握って離さないことだよ（1ニーファイ15：23-25参照）。最大の誘惑は、そ

の鉄の棒を離したり、義の業に休暇を取ったりすることだと思うよ。積極的な面にだけ目を向けることも助けになるね。また、自分にできることやなすべきことをいつも心に留めておいたら、サタン攻撃を弱めることもできるね。教義と聖約121章の41節と42節を見てごらん。神権は「説教と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛と……また親切と浄き知識」によって行使するはずだね。毎朝鏡に向かって自分の姿を眺め、そしてこうした聖句を心の中に思い浮かべたら、恐らく、昔のニーファイのようになって、罪の思いに捕られる度に、恐れおののくようになるだろうね。

息子：自分がどれほど成長しないといけないか考えた時、ちょっとがっかりすることない。

父：あり得ることだね。現に、お父さんも時々がっかりすることがある。でも、頑張れるのは希望を持つことができるからなんだよ。靈感訳聖書の創世記14章には、メルケゼデクと神権のことが書かれている。そこには、喜んで努力を続けると、忠実である限り、必要な時には、海を分け、山を崩し、あらゆるくびきを解き、神のみ前に立つことができるかと約束されている。お父さんは、病人を癒し、嘆き悲しんでいる人たちを祝福し、お母さんやお前たち子供を救い主のみもとに導きたいと、心から望んでいるんだ。また、救い主が自ら統治され、そして人が皆、救い主を知ることができるというシオンで生活したいとも思う。しかし、こういう素晴らしいことは皆、聖なる神権を全力を尽くして義しく行使するようになって初めて可能になることも、よく承知している。そうやってこそ、モーサヤ書8章のあの美しい聖句にある主の約束を成就することができるんだよ。確か、あの聖句はこうだ。「神は人が信仰によって偉大な奇蹟を行うことができるように、その方法をそなえて置きたもうたので、人はそのはらからに大きな利益を与えるようになるのである」（18節）

息子：そうなれるといいね、お父さん。

父：なれるとも。ただし、人が皆心をひとつにして、お互いに強め合うことができれば、だね。お父さんの生涯で最大の出来事は、救い主が本当によくして下さっているということ、段々と深く理解できるようになっているということだ。それも、神権を受けて、教会で奉仕するようになってから理解できるようになったのがほとんどだ。お父さんは、自分の人生で分かれ道に立つ度に、必ずだれかがわきにいて、救い主の愛について教えてくれたが、そういう人たちに本当に感謝しているよ。

息子：そういう人たちって、だれなの。

父：沢山いる。その中で特に3人についてだけ話してあげよう。

ひとり、執事定員会のアドバイザーだった。彼は、お父さんたちが執事の頃、福音についてそれは沢山のことを教えてくれた。今でも子供日曜学校の部屋へ行くと、彼は、小さなすに腰掛けているよ。贖いについて話してくれたら、救い主がどれほど御父を深く愛し、また私たちが完全になることを望んでおられるかということ、いつも涙な

がらに話してくれるよ。

もうひとり、ステーキ部の高等評議員で、お父さんがまだ苦学生で、長老定員会の会長だった頃、一緒に働いてくれた人だ。彼は、予言者の言葉を受することを教えてくれたし、みたまに従って生活する方法を知るよう教えてくれた。彼はステーキ部の祝福師にもなった。お父さんは、彼から祝福を受けたが、それ以来お父さんは強さと導きを与えられている。

そして、3番目の人が、最も大きな影響を及ぼした人だ。その人はお前のお母さんだよ、ポール。お父さんたちが神殿で結婚した頃は、福音のことに、結婚のことに、まるでうぶだった。今でも、その頃の理解の浅かったことを思い出しては笑っている。でもとにかく、一緒に成長を始めたんだ。一緒に聖典を読み、一緒に教会で働き、一緒に悩み、節約し、貯金した。いやいやながらやったために、お互い、苦い思いをしたこともある。しかし、お父さんの人生で最大の祝福のひとつは、お前のお母さんがお父さんを愛してくれているということだ。お父さんはそのために勇気を与えられ、強さを与えられ、そして、真実の愛というものがどういうものなのか、教えられたんだよ。

お父さんをこれまで助けてくれた人たちは皆、みんながお互いに必要なんだということを教えてくれた。だから、救い主のようになるための唯一の方法は、一緒に働くことによって、一緒に成長して救い主のようになることだと思う。

息子：主を愛する人たちと一緒に働けたらいいね。

父：ポール、お前がそういう働きをするための最大の機会、結婚の中にあるんだよ。結婚や家族の仕組とか目的といったものは皆、聖なる神権の行使や権能と深く結びついているんだ。お前が自分のなすべき義務を果たせば、お前もお前の伴侶も、永遠の神権の王国を築き上げて、その王国の中で自分の子供に永久に恵みを与えることができるんだよ。

お前には、信仰堅固で、進んで霊的な進歩を図る神の娘



を捜し出して欲しいと思うよ。お前たちの神殿結婚は、永遠の時という、神権を行使する遠大な機会を与えてくれることになる。お前とお前の伴侶が、福音の絆の中で、お互いに、清く、無私の心で愛し合い、また子供たちを愛することができるようになれば、人が創造された喜びもわかってくるはずだよ。

息子：お父さん、ありがとう。よくわかったよ。

父：ポール、もしできるようだったら、このことも考えてみてくれないか。それは、お前が伝道先で、あるいは教会で召されて奉仕するはずの人々は、すでに存在しているということだ。お前の伴侶も、お前が現在気づいているいなくにかかわらず、どこかにいる。お前の将来の子供たちもどこかに存在しているんだ。だから大切なことは、今そういう人たちを皆、愛し、祝福をもたらすことだと思うんだ。召されたり、結婚したりするまで待つことはない。今、そういう人たちを愛することができれば、自分を清い状態に保つこともできるし、救い主を愛しつつ霊的な面でも義の面でも、進歩することができるだろう。そうすれば、いつ召しが来ようと、いつでも喜んで、純粋な愛をもって人々を祝福し、愛することができるんだよ。ヨハネ伝の15章を開いて、5節から12節まで読んでくれないかい。

息子：「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。

人がわたしにつながっていないならば、枝のように外に投げすてられて枯れる。人々はそれをかき集め、火に投げ入れて、焼いてしまうのである。

あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。

あなたがたが実を豊かに結び、そしてわたしの弟子となるならば、それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう。

父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい。

もしわたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにいるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにいるのと同じである。

わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちに宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである。

わたしのいましめは、これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」

(チョーンシー・C・リドル ブリガム・ヤング大学大学院
部長兼哲学教授。現在、オーレム・ユタ・シャロンステーキ部
オーレム第16ワード部の日曜学校教師として働いている。)

先日、私はワード部の聖餐会で話をした。翌週の日曜日にひとりの兄弟がやって来て、私の話を良かったと言って下さったので、私はその親切にお礼を言ったが、つつい教師の地が出て、話の内容について「どこが良かったとお思いですか？」と聞いてちょっと彼を試してみた。彼はしばらく答えることができなかった。私は、相手を困らせて申しわけない気持ちになったが、とにかく、彼は私の話を思い出せずにいたのである。

その後で、教えたり学んだりする時にみたまを通じて来る霊的な理解や感情や感激に比べれば、言葉で言う福音などは大して重要でないという話に及んだ。

その出来事から、福音の教師というものは自分ひとりで教えるのではなく、チームの一員として教えるのだということ深く印象づけられたのであった。

ニーファイは、「人が聖霊の力で語るときには、聖霊がその話を人の心の中に浸みこませる」(Ⅱニーファイ33:1)と言っている。

そのようになるには、聞き手の受け入れ態勢も必要である。『その時それは静かな細い声で話したもうたが、あなたたちはなんらの感じもなかったのでその御声を感じることができなかった』(Ⅰニーファイ17:45)。私はニーファイが『その御声を聞くことが』とどうして言わなかったのか不思議に思ったものである。しかし今では、それが耳で聞きたぐいのものではないことがわかるようになった。心に言葉が入ってくるのである。そして、その言葉と一緒に感情も。ニーファイが言ったように、言葉を感じるのである。感情で聞くことのできない人は、大して多くのものを得ない』(S・デルワース・ヤング, *Conference Report*)

教える準備

セオ・E・マキーン



「大会報告」1961年10月 p.116-17)

主はジョセフ・スミスを通してこう言われた。「真理を教えんために遣わされたる『慰め主』、すなわち『みたま』によりてわが福音を宣べんためなり。……この故に真理の『みたま』によりて言を受けたる者は、また真理の『みたま』によりて教えらるるまにこれを受くることを汝ら知りて覚り得ざるは何ぞ。この故に、教ゆる者も受くる者も互いに相悟り、両者共に徳に導かれて共に悦ぶなり。」(教義と聖約50:14, 21-22)

福音の教師には最良の同僚、すなわち聖霊がいる。そして非常に心強いことには、いつでも聖霊に頼ることができるのである。問題は私たちにある。私たちはどうしたらふさわしくなれるだろうか。どのような準備をしたらよいのだろうか。

教える用意

このシリーズの最初(1977年4月号)にある「福音の教授と学習」の図に、教師が人に教える前に神との関係で行なっておかなければならないことが書かれている。そのひとつが、真理についての理解と証を求め、それを得ることである。聖霊を伴侶として教えるには、キリストのみ言葉をよく味わって、人に伝えるべきものが何であるかを知らなければならない。「わが言を宣べんと求むることなかれ。然らずしてまずわが言葉を得んことを求めよ。然る後、汝の舌ゆるまり、それより汝願わばわれわが『みたま』とわが言とを与えん。すなわち人々を説得する神の能力を与へべし。……この故に汝出で行くまでは大切に胸におさめよ。而して出で行く時はわが智慧にあり。」(教義と聖約11:21, 26)

最近、エズラ・タフト・ベンソン長老は、教師たちに次のように教えた。

「生徒たちを強くする前に、まずあなた自身が王国の教義を調べ、研究と信仰によって福音を学ぶことが大切である。信仰によって学ぶとは、理解に努め、また信仰の祈りによって主のみたまを求めることである。そのようにすれば、生徒たちに確信を与える力が得られるであろう……。

教える時に神の力を授かるための順序は、まず言葉を得るように努め、次に理解とみたまを授け、最後に確信を与える力を得ることである。確かに、私たちの生ける予言者が教えた通り、『聖典を熱心に読んで得られる祝福がある。それは自分と天父との距離が狭まることであり、自分の霊性が輝きを増す。』(スペンサー・W・キンボール大管長

『範たる人々』宗教教育者への説教、1975年9月12日、p.2)

聖典や生ける予言者たちの言葉に取って変わり得るものはないということを、決して忘れてはならない。そのことを基盤としなさい。主の言われたことに関して人が解説したものを読む回数を少なくし、その分主が言われたことをもっと多く、直接聖典から読んで考えていただきたい。(エズラ・タフト・ベンソン『福音の教師とその教え』宗教教

育者への説教、1976年9月17日、pp.5-6)

この基本的な福音の勉強は、すべての人に欠くことのできないものだが、教師たちは自分の召しに関連したレッスンのテキスト類も準備しなければならない。その責任について、デビッド・O・マッケイ大管長はこう語っている。

「教師に課せられた大きな責任は、教える用意をすることである。教師は、自分の知らないことを人に教えられない。自分で感じないことを生徒に感じさせることはできない。教師自身に証がなければ、神の福音に対する証を若人に得させようとしても無理である。

あらゆる教師にとって、大切なことが3つある。第一、教える事柄を知ること。第二、教える事柄を自分のものにする。第三、生徒にそれを身につけさせること。押しつけるのではなく、あなたが見たものを見、あなたが知ったものを知り、あなたが感じたことを感じるように彼らを導くのである。」(デビッド・O・マッケイ『もっとよく教えるために』Improvement Era「インプルーブメント・エラ」1956年8月号、p.557)

マリオン・G・ロムニー長老は、教えようとする事柄について理解を深めるにはどうしたらよいかを次の4段階に分けて説明している。

「1. 望み 聖典は、人はその望みに応じて主から与えられると繰り返し教えている。アルマは述べた。『人が死を願うのにも生を願うのにも神はこれに応じたまい、人の心が救いを求めるのも亡びを求めるのも神はこれを許したもうと言うことを知っている……。』(アルマ29:4)

またその2ヵ月後に、ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリにこう語っておられる。『汝らわれに願うが如く、正に汝らに成るべし。』(教義と聖約6:8)……

2. 調べること 真の望みとは、単なる願望ではない。それは生きた望みである。人を行動に駆りたてる確信である。神権者が駆りたてられるその行動のひとつは、永遠の生命の言葉を調べ、深く考えることである。

私たちはそれが何であるかを知らずに『神の口から出る一つ一つの言で生きる』ことはできないので、神の言葉を学ぶことが絶対に必要である。……

主は誠命の書の序文で言われた。『人々よ、これらの誠命をしらべよ。そはこれらは真実確なる誠命にして、その中に言われたる予言も約束もすべて成就さるべければなり。』(教義と聖約1:37)

私たちは、『聖書と……モルモン経とに誌されたるわが福音の原則を教うべし』との神よりの指示を受けている(教義と聖約42:12)。その原則が何であるかを知らなければ、教えることはできない。

予言者ジョセフとオリバー・カウドリとジョン・ホイットマーに主は言われた。『見よ、われ汝らに告ぐ。汝らは聖典を学び……ために専ら汝らの時を費すべし。』(教義と聖約26:1)……

3. 深く考えること 私は、聖典を読んでいて、モルモン経によく出てくる『深く考える』、『よくよく考える』、

『思いにふける』という言葉に心を動かされた。辞書では、これらの言葉（*ponder, meditate, reflect*, 以上は同義語である）は『心にはかる、物事について深く考える、思案する』という意味である。モロナイはこの言葉を自分の記録の最後に用いている。『ごらん、私はあなたたちにすすめたい。あなたたちがこの記録を読むことを神が許したもうならば……主が世の人々にどれほど憐みを垂れたもうたかを思い起して心の中に深く考えてほしい。』（モロナイ10：3）

イエスはニーファイ人に言われた。

『汝らは理解力弱く……教えが、ことごとく汝らに了解されざること明かなり。……されば、汝らは各々その住居に帰りて後、われがこれまで汝らに語りしことをよくよく考えて、汝らの理解できるために……わが名によりて御

父に祈るべし。』（Ⅲニーファイ17：2，3）……

4. 祈り 『永遠の生命の言』を望み、調べ、深く考えること、かくも重要なこの3つがすべてそろっても、祈りがなければ不十分である。

祈りは、救い主に至る門を開く仲立ちとなるものである。主は言っておられる。『見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまた、わたしと食を共にするであろう。』（黙示3：20）……

ニーファイの訓戒を聞いていただきたい。私はこの言葉が私を感動させたように、皆様方の心を打つことを願うものである。ニーファイは言った。

『さてごらん、私の愛する兄弟たちよ。……私はキリストの言葉をよく味わえとあなたたちに勧めた。それはキリ

「またわれ汝らに一つの誠命を与う。すなわち汝ら互いにこの王国の教義を教ゆべし。汝ら熱心に教えよ、さらばわが恩恵は汝らに伴い、かくして汝らの理解する必要がある理論と原理と、教義と福音の律法と、神の王国に就けるすべての事は更に完全に教えらる。また天にも地にも地の下にも関わりあること、またすでに起りたること、今有ること、近く必ず起らんとすること、また国内に有ること、国外にあること、また戦争、諸国民の葛藤、地上に下る審判、而して国々と王国とに就ける知識などもまた然り。これ、汝らがわが汝らを召したる天職と、わが汝らに委任したる使命とを全力を尽くして遂行するために、われ再び汝らを遣わす時に汝らすべての事に用意あらんためなり。」（教義と聖約88：77-80）

この教会は教師たちの教会である。末日聖徒の家庭では父母がみ言葉の教師となるように、主の啓示によってはっきりとそう言われている。また、補助組織と定員会はすべて、根本的な意味で教師と言える人々から構成されている。従って、この啓示はすべての人々に対して言われたものである。

教師に課せられた大きな責任は、教える用意をすることである。教師は、自分の知らないことを人に教えることはできない。自分で感じないことを生徒に感じさせることはできない。教師自身に証がなければ、神の福音に対する証を若人に得させようとしても無理である。

あらゆる教師にとって、大切なことが3つある。第一、教える事柄を知ること、第二、教える事柄を自分のものにする、第三、生徒にそれを身につけさせること、押しつけるのではなく、あなたが見たものを見、あなたが知ったものを知り、あなたが感じたことを感じるように彼らを導くのである。

どの教師も、クラスの少年少女たちの前に出た時には、自分のレッスンの用意が整っていなければならない。よいだろうか。あなたのレッスンや、レッスンの中の真理に対するあなたの態度が、真理と教会活動全般に対する少年少



「もっとよく
教えるために」

デビッド・O・マッケイ大管長

ストの言葉は、あなたたちのしなくてはならないことをみな教えるからである。従って私がこのようなことを話してからでも、もしあなたがまだ解らないならば、それはあなたが尋ね求めもせずまた天の門を叩かないからである。従ってあなたたちは光明のある所に導かれなくて、暗黒の中に迷って亡びるに違いない。

さて私の愛する兄弟たちよ。私はあなたがまだ心に考えこんでいるのを認め、このようなことをあなたたちに戒めなければならないのをまことに悲しく思う。あなたがもし祈らねばならぬことを教える『みたま』の言葉に聞き従うならば、あなたたちは祈らなくてはならないことを覚るであろう。悪魔は祈れと人に教えず、かえって祈ってはならないと教える。しかしごらんよく言うておく。あなたたちは力を落さずに、いつも祈らなくてはならない、

女の態度を大きく左右するのである。レッスンの後、来ても何も得られなかったという思いを残して若人たちを去らせるならば、翌週も彼らを出席させることはむずかしいであろう。その反対に、彼らの心を感動させたならば、あるいはそこまでできなくとも、心に訴えることをたったひとつでも与えたならば、彼らはまた来て聞きたいという気持ちを示して翌週も出席するであろう。

子供の心に思考を促すレッスンを行なった後、その小さな子が何か質問に答えて自分を認めてもらおうと一生懸命になっているのに気づいたことがあるだろうか。

ただテキストを読むだけでは不十分である。それだけではレッスンを自分のものにすることはできない。レッスンが自分のものになるまで、つまり生徒に伝えることを完全に自分のものにするまでは、み言葉を伝える上で主から求められている召しを果たす準備はまだできていないと言えよう。生徒の心を動かすのは、教師が心から生徒に伝えたいと思っている事柄である。テキストにあるレッスンは、研究と信仰と祈りによって初めて自分のものになるのである。

次に「教える精神」についてだが、ただ次のことだけを申し上げたい。主が十字架にかけられた後で、ある日ペテロは「わたしは漁に行くのだ」と言った。ペテロは漁の仕方を知っていた。彼は漁師であった。しかし彼は、人を漁る者としての自分の使命が何であるかをはっきりとは理解していなかった。その時にトマスやほかの者たちが、「わたしたちも一緒に行こう」と言った。朝になると魚が網一杯にかかり、火がおこされ、パンもあった。食事をすませると主が彼らの間に立って言われた。「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか。」

「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです。」

「わたしの小羊を養いなさい。」(ヨハネ21:15参照)

ここに教える精神の心髄がある。少年たちを養いなさい。

そして自分たちの働きが自分の身も霊も救われるように天の御父がその働きを祝福したもうよう、キリストの御名によってまず天の御父に祈らないでは主の御前にどのような働きもしてはならないと。』(IIニーファイ32:1, 3-4. 8-9)」(マリオン・G・ロムニー「聖徒の道」1973年12月号 pp.569-571)

みたまを受けて教えることは大きな召しであり、チャレンジである。「されど、もし汝らに備えあらば怖ることなからん。」(教義と聖約38:30) また、教える際に伴侶となってくれる聖霊が私たち以上に生徒に大きな影響を及ぼすならば、私たちはまごつくこともないであろう。教えることは神のみ業であり、神の栄誉、栄光である。私たちがそのみ業の一端を担う時に、十分な恵みを受けるであろう。

少女たちを養いなさい。少年に、あなたが彼ら一人一人を心にかけていることを知らせなさい。町で会ったら、彼に関心を寄せていることを知らせなさい。心の愛を輝かせなさい。そうした時に、少年の生涯に実を結ばせ、ついには不死不滅と永遠の生命を与え、事実神の栄光となる真理の種の、まくに良い土壌を確保できるのである。

教師の皆さん、あなた方は自分がどんな可能性を宿しているか御存知だろうか。いつであったか、教師が常に承知していなければならないその可能性について書いたことがある。幾人かの、いや恐らくは大勢の少年少女の心にそれを起こさせる力が教師にはあると思う。それは、

1. 弱さや甘えに打ち勝とうという望み。
2. 人生には勇気をもって、災いには不屈の精神で、死にも恐れることなく立ち向かう力。
3. 男性に対しては男らしさ、女性に対しては女らしさを育むこと。世の中にこれがどんなに欠けていることか。
4. やがては互いに夫や妻、模範的な父親、愛情深く賢い母親となるにふさわしい者になろうという気概を、大勢の人々に持たせること。これは教師であるあなたの特権である。

5. イエス・キリストの福音に対する愛を育むこと。福音に従えば、この世では幸福、そして永遠においては救いと昇栄が得られる。

教会活動の最終的な目的は、主の靈感と導きの下に、人に不死不滅と永遠の生命をもたらす助けをすることである。さしあたって私たちの現在の目的は、老若すべての心に、神のみ業についての証を確立することである。この証がなければ、永遠の生命を得ることはできない。「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ること」だからである。(ヨハネ17:3参照)」(デビッド・O・マッケイ『もっとよく教えるために』Improvement Era「インプルーブメント・エラ」1956年8月号)

私は大正13年1月21日生まれ、昭和25年に医師国家試験に合格してから、一筋に医師として、働いてきました。

その間様々な人生の試練にも遭い、悩み苦しんだこともありましたが、私は自分の悩みの解決策として哲学を選びました。そして様々な哲学書を読み、少なからずその影響を受けました。

哲学を通じて、神を知り、イエス・キリストも知りました。そして私の心の奥底に、私の全身を投じて信じ得るものを探し求めようとする気持ちがありました。しかし、私の全存在を支え、私のすべてを投げ捨てても信じ得るものは見いだすことができませんでした。またそれがいずこにあるのかも知ることができませんでした。

私は宗教というものがある意味では軽んじていたようです。宗教というひとつの決まったカテゴリーに入るならば、真の自由はないのではなかろうかとも思い込んでいました。こうした最中に、1976年7月のことですが、モルモン宣教師の方の訪問を受けました。

そして、何か心ひかれるままに話をうかがいました。そこで初めて聞いたジョセフ・スミスの証は私にとって大きな驚きであり、これが本当なら、私が今まで考えていた宗教とは全く異なるものであると考え、それから何回となくレッスンを受け、またモルモン経を読み、私の心には少しずつではありますが、真理の光が射し込み始めました。私はいつしかこの教会とこの教会の有する聖典とには、今まで私の経験したことのない真理があることを強く確信するよう

神様の愛に包まれた喜び



日本札幌伝道部 函館支部
古河 廉一郎

になりました。しかし、知ることと信仰とは違います。私には、この教会に、またモルモン経に真に神の教えがあり、完全な福音があると思えることはできても、それが直ちに信仰への道にはつながりませんでした。私は自分で自分の心に素直でありたいと考えました。ですから宣教師の方に何回となくバプテスマを受けるよう勧められても断わってきておりました。

私は私なりに努力したつもりです。1976年は私にとって試練の年であり、私の心には様々な悪が潜み、私はその悪に立ち向かい、何とか克服しようと努力していました。そして、悪に立ち向かっては敗れ、どうしても打ち勝つことのできない自分に絶望しかかっておりました。ちょうどそのときに教会の方の訪問を受けたのです。そして聖典を読み、神の律法を知れば知るほど、私にとって神がいかに遠い存在であるかを、努力すればするほど、神は私から遠ざかっていくようでした。そして悩んでいた私に、素直な心で信仰の道に入りたいと切望していた私に、ひとつの記念すべき日が訪れました。私はその日のことを忘れることはできません。今考えても心が燃え、神の愛を賛美せずにはいられなくなるのです。そのときの私の心を日誌に書きました。

これは私が初めて得た大きな証でありました。生涯を通じて私の心の支えとなることでありましょう。この証は私が自分だけの力で得たものではありません。神が私を導きたまひ、その証を与えて下さったのです。つたない文章ですが次に読んでいただければ幸いです。

☆

☆

☆

「1976年11月29日は私にとって生涯忘れ得ぬ日となった。私の職業は医師で、小さな内科医院を経営しているが、その日は、たまたま急病センターの当番医に当たり、午後8時から午後零時までの間、急病人の診療に当たっていた。急病人の大多数は小児科で、私の専門とする内科に来る人はほとんどなく、私は専ら持参した「信仰箇条の研究」を読んでいた。そして引用してある聖句について、聖書やモルモン經を開きながら調べていた。

どういうわけで私の目に触れたのか、思い出すことができないが、私はヨハネによる福音書15章16節にある聖句を読み、大きなショックを心に感じた。その聖句は、『あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである』と十二使徒に向かって言われた言葉である。

その聖句を読んだとき、私にはそれがまるで私に向かって言われているように思えた。

心の中に熱いものが走った。急病センターの机の上で思わず目頭が熱くなり、涙があふれるのを覚えた。私は何度も何度もこの聖句を繰り返して読んだ。そこにあるのは神の愛、主イエス・キリストの大きな愛であった。私は、主イエス・キリストの大きな愛を如実に感じ得たのである。そして私の心は、ひとりでに主なる神を賛え、神の名を賛美していた。そのときの私の心の内をそのまま書き表わすことは難しい。表現しようにも表現できない何物かがある。『私があなたがたを選んだのである。』私はそこに深く限りない神の愛を見た。

私の心は神の愛で満たされ、神を賛美する祈りが繰り返し繰り返し私を襲って来たのである。

私にとって、今まで主イエス・キリストははるか遠くにいまし、私は律法を守ることによって懸命に神に近づこうと努力していた。私にとって、神は遠い存在だった。だが今は違う。

神を求め続けてきた私の背後に、すぐ私のそばに主イエス・キリストが愛の手を差し伸べて立っておられたのである。

ああ、私は何と愚かな者だったのであろう。

イエス・キリストは私のすぐそばにいらっしやったのである。深い愛をもって、手を差し伸べておられたのだ。

私は神の愛に包まれ、主イエス・キリストの愛に包まれ、喜びに満ちあふれ、今まで一度も心から神を賛美したことなかった私が、思わず、知らぬ内に、無意識の内に神を賛美していたのである。

私の心は燃え、神の愛を感じることは、翌日もまたその次の日も何日も続いた。私は患者の診療のとぎれたときに、またひとりになったときに、イエス・キリストを、そして主なる神をほめ賛えた。私の心は熱く燃え、体も燃えるように熱くなり、涙がしたり落ちるのを止めることができなかった。

私は主を賛美する。大いなるみ業を賛美する。何度私は繰り返し祈ったことであろう。そして私は自らの罪を悔い、主イエス・キリストのみ名によって清められたいと切に熱望するに至った。

『天にいますわれらが父よ、み名をあがめさせたまえ。

罪深き私をみ心ならば赦したまえ。

み心ならば、私をしてバプテスマを受けさせて、あなたの子羊のひとりに数えさせたまえ。

私は主イエス・キリストを信じ証します。

生ける主イエス・キリストを信じます。

あなたの計り知れぬ大きな愛を、私は今知りました。

私の高慢さを、どうぞお赦し下さい。

私の罪を贖い清めて下さい。

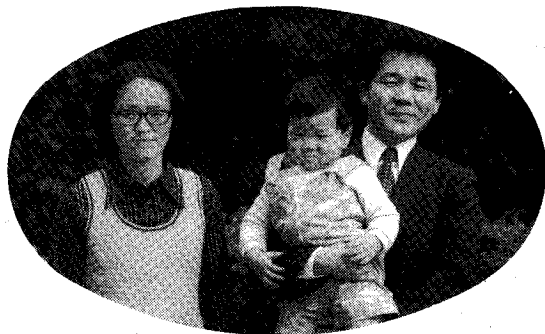
私を導き、信仰の種をまき、育てて下さった長老の人たちの上に

どうぞ、あなたの限りない祝福を注いで下さいますように。

また、私を温く迎えて下さった教会員の上に、あなたの恵みと祝福がありますように。』

これらのことをすべて愛する御子イエス・キリストのみ名によってお祈り致します。アーメン。』

真実の教えに触れて



日本横浜ステークス部

横浜第2ワード部

二宮敏雄・千代美

ある日の夕方、ふたりの宣教師が私の家に来ました。私は宗教について関心が無かったので「結構です」と言うと、その宣教師は「内容も知らないで断わるのはおかしいですね」と言いました。日本語を上手に話すのと相まって「この外人かなりやるなあ！」というのが第一印象でした。そして彼らに、日本人として、いや、人間として非礼な態度だけはとりたくないと考え、一応話を聞いてみよう、そして受け入れられない所が出て来たら断わろう、そう思いました。正直に言って、初めはモルモン経についてはあまり興味はありませんでした。しかし年若い宣教師については大変興味を持ち、そして彼らが、学業途中で母国を離れ、遠い日本に自費で宣教に来ていることを知り、私の同年代の時と比べ、同じ人間でこうも違うのは何故だろうと考えました。そしてそれが、強い証の上に立った信仰であることを知ったのです。

私は福音を聞くまでは、人間は人間自身の力で自分の問題を解決するように努力し、たとえそれが思う通りに解決できなくても、宗教を信ずべきではなく、また現在解決できない問題も、今後の科学の発達、知識の進歩によって解決されるはずであって、その解決を宗教に求めるべきではない、宗教は自己逃避である、と考えていました。しかしながら過去の人生経験より、自分の無力さや自分の心の醜さを、いやというほど知らされていたので、心は常に平安を保つことができませんでした。そして、心の不安や自己の弱さの克服のために、いろいろな趣味に活路を求めました。確かに、実際にその趣味に没頭している時は心の不安はなくなるのですが、それ以外の時には、前にも増し

て心の不安がつり、趣味も多少は不安解消に役立つが、完全な不安の解消にはならず、一時凌ぎに過ぎないということを知りました。もうひとつ私たち家族にとって一抹の不安として残っていたのが、母親のお腹の中で死んだ胎児のことでした。このままでもいいのか？ 何か供養をしなければ、と思いましたが、良い考えが浮かびませんでした。そして、福音についてのレッスが始まりました。以前より聖書や手引き書は持っていましたが、その書かれていることがあまりにも崇高であり、参考書にはなっても、信仰にはほど遠いものと思っていました。レッスンを受けるのはいつも夜、仕事に疲れ帰宅した後の1時間位でしたが、実に充実した時間でした。そして今までただ持っているだけだった聖書の読み方や、今まで初めからできないとあきらめていたことなどにチャレンジしてみよう、という気持ちになりました。私は福音を聞くたびに、潜在意識として私の中にあった不安が、信仰により解消していくのを感じました。レッスンの内容は完璧でした。私が以前「スケアクロウ」という映画の中で疑問に思っていた「バプテスマを受けずして死んだ乳幼児は天国に行けない」というクリスチャンの言葉は、モルモン経のモロナイ書8章を読んだ時に誤りであることがわかり、真実の教えを正しく理解することができました。私は宣教師から福音を聞いて、約1ヵ月ほどした昭和51年12月25日に姉妹と共にバプテスマを受けました。最後に夜遅くまで、何度も、私の家に福音を伝えに来て下さった宣教師の方々と、私たちを暖かく迎えて下さった教会員の方々に心より感謝いたします。

ある夕方、ふたりの宣教師が来ました。私はいつも宗教の勧誘の人は断わっていたのでその時も断わろうとしました。ところが彼らは御主人いますかの一点張りです。しかたなく、主人と代わりしました。しばらく話していたようですが、1枚の紙切れを持って、主人が戻って来ました。それには、私たちはどこから来たのか、なぜ生きているのか、どこに行くのか、そのような質問が書いてありました。私

は何も感じませんでしたし、知りたいとも思いませんでした。ただ、今生きているこの現在を、しっかり生きていけば、それで良いと思っていました。それなのに、私にとって愚問とも思えることを、さも大切なことのように伝える宣教師を、気の毒に思ったくらいです。そして「え？ モルモン？ そんな聞いたこともない教会に入らなくなつて、カトリックとか、もっと、ましな教会に入ればいいじゃん

いですか。第一、私に宗教は必要じゃないですから」と言
って、渡された紙切れをくずかごに捨てました。私たちの
会話はそれきりでした。それから1週間もたったでしょう
か。また御主人いますかと来たのです。その時、主人は部
屋に通しました。彼らはとても喜んで、ジョセフ・スミス
の証の話をしました。私は内心、主人の物好きにも困った
ものだ、信仰する意志もないのに、こういう話を聞くと、
断わりにくくなるのではないかと、考えていました。その日
私の頭に残ったのは、モロナイ10章4節の言葉だけでした。

彼らは、それから毎日のようにやって来て、レッスンを
始めました。そうする内に、私は彼らの素晴らしい人柄に
魅了されていきました。けれども、入信する気はありません
でした。そうした時に、主人が買ってきたキリスト教入
門という本に、大切なことはどの宗教を選ぶかではなく、
どの宗教に選ばれるかということである、という文を見つ
けました。そして、私は今モルモン教会に選ばれているの
だ、それなら入ってみよう、嫌ならやめればいいのだから、
という考えに到達しました。しかし神は、大した証もないの
に、私が入信することを拒まれたのでしょうか、ひとつの
試練をお与えになりました。それは、モルモン信者が過去
に一夫多妻をしていたことを知ったことです。私の心の中
に芽ばえていた信仰の芽は、みるも無残に踏みつけられま
した。この教会はインチキだ、そんな不合理なことを神が
お許しになるわけがない。宣教師は好きだが、そのような
過去のある教会に入る気にはなれない。それから毎日、私

は、朝から晩まで、一夫多妻について考えました。私はも
うこの教会には入らないと思っていたながら、宣教師の方が
見えてからの私たちの生活を振り返ってみると、以前とは
比べものにならないほど、充実した毎日を過ごしていたこ
とに気づきました。そして、つかみかけた幸福を、たった
ひとつのことで逃がすのは惜しいという気持ちになってきた
のです。宣教師の方を悲しませることは、とてもつらい
ことでした。そして私は、以前買っておいた旧約聖書入門
という本を、わらにもすがる思いで読み始めました。そし
て、自分の傲慢さ、神を恐れず、人に、あの人は一夫多
妻の教会に入っていると後ろ指さされることを恐れていた
ことに気がつきました。神のなさることはすべて正しく、
人間の目に不合理に見えることも、神の目には正しいのだ。
人を恐れず神を恐れよ。私はそういう結論を得ました。そ
して初めて聖書の読み方を知ったのです。何かを求めて読
めば、答えはおのずと出てきます。「求めよ、さらば与え
られん」は真実であることを知りました。今まで、モルモ
ン経と聖書を宣教師の言われるままに読んでいたのですが、
これからは深い信仰を得るため、真理を学ぶために、目的
を持って読みたいと思います。

私は12月25日に何のためらいもなくバプテスマを受ける
ことができました。しかし残念なことに、私はまだ強い証
を持っていません。その証を得るためにも、頑張っていき
たいと思います。

ブリュッセルにベルギー最初のステーク部が組織される

ブリュッセル・ベルギーステーク部
は、ベルギーにおける最初のステーク
部で、今年の2月20日にジョセフ・シ
ェインをステーク部長として組織され
た。

最初のステーク部大会は、十二使徒
評議員会のトーマス・S・モンソン長
老の管理と、七十人第一定員会のチャ
ールズ・A・ディディエ長老の出席の
下に開かれた。

新ステーク部の副ステーク部長とし
て支持されたのは、マーセル・カーン
とウィリー・ギレン・デュブイーであ
る。

福音が初めてこの国にもたらされた
のは、1888年のことであった。その後
1891年にオランダ伝道部の一部となり、
1912年には、フランス語を話す支部が
フランス伝道部に移された。そして、
1960年代の初期、フランス・ベルギー伝
道部(現在、ベルギー・ブリュッセル伝
道部と呼ばれる)がベルギーのフラン
ス語を話す全支部を包含した形で組織

された。その伝道部には4つの地方部
があったが、今度の新しいステーク部
は、その中のひとつ、ベルギー地方部
から組織されたものである。

会員2,233人のブリュッセル・ベルギ
ーステーク部は、ブリュッセル第1、
シャーレロイ、ハースタル、リーズ、
ネイムの各ワード部と、ブリュッセル
第2、セレン、モンズ、ニーベル、ベ
ルブイエの各支部及び軍人支部から成
っている。

シェインステーク部長は、ベルギー
のリースで生まれ、今年37歳である。
改宗者で、1967年4月30日にブリュッ
セルでバプテスマを受けた。ジャクリ
ーン・M・クリスチアーヌと1962年10
月18日に結婚、現在4人の子供がいる。
これまで支部長、副地方部長、地方部
長を歴任した。彼は、ブリュッセルの
ゼネラル・タイム・シェア社のコンピ
ューター及びターミナルのフィールド
エンジニアとして働いている。

第一副ステーク部長のカーン兄弟は

40歳、ベルギーのアントワープで生
まれた。1957年2月10日に教会員とな
った改宗者である。1964年7月1日、
ポートレット・ギルズと結婚、現在4
人の子供の父親である。過去、長老定
員会会長、支部長、地方部評議員、そ
して地方部長として責任を果たしてき
た。カーン副ステーク部長は、「基督
イエス」を英語からフランス語に翻訳
した人で、現在、ベルギーのアーンデ
ンの高校で、英語、ドイツ語、オラン
ダ語の教師をしている。

第二副ステーク部長のデュブイー兄
弟は37歳、ベルギーのマーバイクス・
ラ・ツァーで生まれた。改宗者で、シ
ャーレロイで1967年11月7日にバプテ
スマを受けた。1965年12月6日、ジャ
クリーン・ギーリーと結婚、3人の子
供がいる。現在・キャタピラー会社の
スタッフエンジニアとして働いている。
過去、YMMIA会長、支部長、地方
部評議員、副地方部長を歴任した。

O lo'u lava talaaga. Mi diario. Min dagbok.
 Ko'Eku Tohi noa. 나의 일지. Min dagbok.
 Mijn dagboek. Päiväkirjani. 私の日記.
 Mon journal. 我的日記. Mein Tagebuch.
 Il mio diario. min dagbok. Meu diário.
 나의 일지. O lo'u lava talaaga. Mi diario.
 Min dagbok. Ko'Eku Tohi noa. 私の日記.
 Min dagbok. Mijn dagboek. Päiväkirjani.
 我的日記. Mon journal. Mein Tagebuch.
 Min dagbok. Meu diário. Mon journal.
 O lo'u lava talaaga. 나의 일지. Mi diario.
 Min dagbok. 我的日記. Ko'Eku Tohi noa.
 Päiväkirjani. Mijn dagboek. Mein Tagebuch.
 Min dagbok. Il mio diario. O lo'u lava talaaga.
 私の日記. Mi diario. Min dagbok. Mi diario.
 Il mio diario. 나의 일지. Ko'Eku Tohi noa.
 min dagbok. Il mio diario. Mein Tagebuch.
 Mon journal. Päiväkirjani. Mijn dagboek.
 我的日記. Ko'Eku Tohi noa. Mi diario.
 Min dagbok. 私の日記. O lo'u lava talaaga.
 Meu diário. min dagbok. Mein Tagebuch.
 O lo'u lava talaaga. Meu diário. Mon journal.
 min dagbok. Il mio diario. 我的日記.
 Min dagbok. min dagbok. Päiväkirjani.
 Mijn dagboek. Mon journal. M.
 Ko'Eku Tohi noa. Mein Tagebuch.